



1654
2

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈



維新歲時記秋之部 序 曲亭主人纂輯

秋

秋ハ繼テリ万物を瀟瀟ト使時小成
之秋名ありハ明之清明より成
りてありハとんと通じカ物秋小なり
ル
寒を落しけりるるを秋といふ也

白藏 月令淮南子 尊收 月令 白藏 雨

收成 月令淮南子 金高 唐高宗 明景 詔勅 孟秋 雅

朗景 元帝 爽頼 殷仲文詩 夷具 月令廣雅 秋声賦

七月 立秋 節 大暑の後十有五日 處暑 中

新秋 韓 相月 余雅 七月庚を
斗申小建之 相と香 初秋 和方小初秋ハ七月十日三

首秋 元帝 纂要 初秋 和方小初秋ハ七月十日三
を以 中院通茂無秋立云ハ

長つ日さひまき六月、七月を新長月、
十四日を以秋とし、八月を秋、
九月を秋、十月を秋、十一月を秋、
十二月を秋、

相秋 淮南子 蘭月 月令廣義 蘭秋 提要抄

上秋 纂 啟筆秋 全 文月 この月七日を

書ともをいひくも文をいひく月と
又又これを略し文月といふ 奥書抄 たかき月

玉 盆秋 女市花月 藏 親月 この月

墓、傍るもあふ 和介雅 按ふふい説
詳なるも親月とお訪ふて親ひのまへ 今日の秋

一葉 柳らび 一葉八柳をいふまへ 諸寺施餓鬼

げ月、給りよりまを寺院の例よりと、
を四隅に接し、これを須弥の四隅に比せし、
福、中央に符の供物を備え、鬼子母神人の子をとり食ふ
を弘戒めて、今より世が食、別は女人とす、
ひめこの也、名小

末世の仙才子不勅して、
渴をまじむと、或は月連の母、
これ切絶を設け、法の餓鬼をして、
○廣大に餓鬼の法、
作る長サ二尺、
鬼神おろし、
八泉池に海流水中、
む時を、
とて云、
又七如来の膳を揚ぐ、
食の、
日とも五百人間の一月を一日として、
新吉原燈籠籠 一日より 真像元年 江戸吉原の籠

七月中の町の揚屋各燈籠籠を出し、
毎年これあり、
を送る、
を燈籠籠とす、

七

この外八月廿日方曾まぐ妓女俳優をうとれを俄に
 或三月中の町は様を裁九月菊を植ふ近年の裁ま
 たり九柱里の夕作八今うさささう小も一か敷き洲
 う一日は堤の方ありおもひけを花ようをわくたさ
 うかかとの夜のまのまはれりなりのまをくんは一人の
 人初まは似城新造きりまの夕作あり時味こと
 何ホのまをえり不塔さる **小野沖水** 六日山城の國
 どのくの条下に流ま **小野天満宮** ありこれ西下光朝日寺の地より帝廟
 より小あつるを以て北野と名づ七月六日小松栢院
 水の水を神茶に供も松風の祝小穀のまを添てこと
 供も松栢院より初年或は左隣ありとふこれ後所とそ
北野煉掃 七日 毎年七月七日小野の村内外の陣あり
 此を曝もまの同宮内外 **札わひ 硯洗**
 の陣は煉をそとふ **雍州府志**
 見童七月六日札硯を洗ふと小野の村を遊ゆれ
 たり一今八二星より向るとのをまふ美小とまき

七夕

牽牛織女一年一會昏宵の令前なり故小夕
 と以月令廣義 たちと八空を以てこか雲と
 いも天の星をさるるも八空の機ある娘と云とるを
 の棚もさるるあはれも意に俗小こかと **詞林采葉** 和分
 の影小七夕とも書ふ小織女と書 **八雲御抄** 今の
 人七夕と書きたるるともむハ誤七夕ハ七日の夕之
二星 **牽牛星** 織女 **牛女** 二星の名を
 いさる星 河鼓 いぬる 上略せりなり
 焦林大斗記云天河
 の西二星あり煌と云

をなほはるわなを

参とも小出ッこれを牽牛と云天河の東小星あり微とて
 辰の下ありこまを織女と云世小双星と云 **月令廣義**
秋さり娘 小たりの娘 さまぐに娘 百子娘
糸あり娘 ねうほ娘 梶の葉娘 ○以上こま
 ちる七娘れ **たがさつら** ちかると妻をいり致を
 名へ **藻汐州** たがはる女をいり後の祝
 ち **ささり妻** 万葉 あまの姫をいり **こり心娘**
 ちりさ妻といふや

ひときとをどと

星の安 星合

天河の東は織女ありて天帝の

子之機梭勞役の容を理ふ違わむ天帝の独居を憐れし將小嫁せんとて河西の牽牛を夫とす嫁して後竟小女子を廢て天帝怒り責て

秋より衣

河東小婦は惟一年一會せむ拜階記

七夕布ちり八雲所抄只秋のころと小や秋よりと八秋よりと

ふとと万葉拾遺秋より衣ハ七夕の貝貝徳説七夕此貝

小く由來しとのとふれ連言新式馬琴按む小秋さ

ア衣ハ衿をいふる一山紀開者五小云万葉小十二

ふもその五百機を抄布此秋より衣ハゆりも

所釈去集中万小去ハ未小けりといふことを去

去小たりとよめりうに秋より衣といふまに名つけ

りり云云待賢門院堀川の小旅りて秋より衣

さむまにいつてか吹を武庫の浦凡八雲所抄

七夕布ととせりハ万葉の小注さむあまのう

べとと後のおとああまのう雲漢

あつて七夕ハ限るべとと物理論天河

天河ハ箕の回小あり長と天小なり宇東天河ハ

水の精之氣復て外精華浮上宛轉てをひ

流物理論天漢銀河星河左界靈源銀

灣銀漢ふあまのうとむ或書云天の五

行日ハ火月ハ水星ハ木辰ハ土淮南子

銀漢ハ金氣のお聚るなり鳥鵲橋

羊小後成恩寺殿の聘記をし史記云瓊玉

支那わり夫を遊子とい婦を伯陽と偕老の誓り

休小ハ二ハの候陽ハ三四の旬小花子十六

伯陽十二支の支ぬとなり互小切とに

月を雲を限かく夕小月の出をまらく

里小ハ曉ハ月の入を惜とて小羊に出る伯

陽九十九ハ死を遊子う歎きて月を形見と

尺小後不夜伯陽鶴小まりく空を花子

たハ花子物小まりて百三十ハ死せり遂二

天の星となりて鳥小のりて天を花子支妻銀

河を隔りうさんも帝款毎これ川わて水を浴

多る多小水様わりて浴を許まりてまれも

七月七日八帝叙法堂也其の日は凡水を浴び
 る引流るるを許さぬ事小一夜といふ人同の者
 小一日一夜この時鳥と鶯と羽を忍橋とありて
 牽牛織女を通せんを鳥鶯の橋といふ遊仙崖
 小病鶯の二字をやめめきとありて
 鳥鶯の二字をうきとありて鳥鶯 **年七渡**

年小一五天の川 **紅葉の橋** 鳥鶯の橋ハこと小
 をもるること

あまをいふ **八雲御抄** 漢毛信小鳥鶯の橋の小ハ
 紅羽を敷二星の形也凡冷くは是を紅

葉小あねも紅葉といふつけ羽の字をさうの
 赤よりむなり二星のあねの涙鶯の羽を添て

紅二あるを **二星の登形** 唐の天室中後宮七
 いり **芝藻抄** 夕二錦縁を結びて

樓殿を成高百丈數十人を容下花果酒多を
 陳ねれ具を設け以て牛女の二星をまらり

本朝の歌ハかくこ小吳之七の棚を張り花を
 花果を偽を焼おれるあり共これ星の登形

とふ **乞巧奠** 唐の宮嬪七夕小蜘蛛を以
 なり 金盤の中納し曉不開て蜘蛛の
 糸の掃密を根く巧の身なりと云 **潜雅類書**
 七夕は婦人糸縷を結ひ七孔針を穿ち或ハ金銀
 鑰石を以て針と凡菓を庭中散ね以て
 巧を乞蟻子あり凡の糸網を乞ハ巧を
 得たりと云

煮餅 七月七日織女神を祭る又事
 牛神あり其供ふは煮餅を

荆林是歳時記 以て是糸織の象小表を並小粉麵を以てこと
 鋤耕の象小表也 **先代旧事記** 昔高辛氏の女子七

月七日に死す其の冥鬼神となりて人ニ瘡を病ハ
 其の存る日麦餅を好む故其の死日小あね煮餅

餅を以てこを祭る後人其煮餅を食ハ瘡疾
 を患む **十節記** 七月七日の煮餅ハ巨且筋ハ **蓋蓋**

内傳今の俗七夕小冷き煮餅を **洗車雨** **洒決雨**

今ハハハハの工小煮餅を **洗車雨** **洒決雨**

七月六日の夕を洗車雨といひ七日の夕を洒決雨とい

天中記この夕雨ハ二星をまらり俗説の洒決

天中記この夕雨ハ二星をまらり俗説の洒決

天中記この夕雨ハ二星をまらり俗説の洒決

天中記この夕雨ハ二星をまらり俗説の洒決

をちひし **七巻の池** **百子池** 戚夫人の侍見 賈佩蘭後生

披風の八條佛の妻とあり宮内あり何の事を説云云七 月七月百子池は福三子因樂を乞ふ樂多て五色綵

水を入り大なる星を移す 公事根源七巻の池と八七 の鹽水を入り鏡をつらく星の影を移すを百子

妻送船 八雲 左小舟 全 妻送船 藻 妻送船 舟抄

貝穂船 八 七種の船 いろくの室を七束つと 七月 星祭 星のよ 七月

香粉を河鼓織女に散 一星のまきまきあて夜をゆる

去成志を懐く或は天漢中をさる小赤くる白光 ありこれを徴とく又る名あり形を乞ひ着を乞ひ

先ッ七日は六義人河涸度を取ひ板小夜歌にて乞巧を夫 あり河鼓の座小机四脚をさく灯臺九弁各灯あり

机の上のろの物をまきえり 公事根源筑前國大崎 の星の宮とく北の彦星をあり南の織女を崇む二社

小この七月七日の夜をたむり河中に板を移す しく鹽上中 之の小水を入り双づく鹽三ツに男の名を書

願の糸 乞巧眞西山の机の上金針七ツ銀針七ツを 挿之件の針別ふ七孔あり五色の糸を以

以七孔鍼を用襟樓小穿便以て習之 西京雜記

七夕小婦人綵錦を縫ひ七孔針を穿つ或令あ報詢あ石
 を以て針とて歳時記又唐の宮中七夕小妃あ嬪各
 九孔針五色線を執と月に向つこれを穿たるる者あ六
 巧を得とりとます○明皇貴妃あも七夕小花清宮
 小宴あ酒饌あを座つね息あを牛女あにむむ又各あ蝮
 蝶あを捲とく小合あの中あにあ暁あ小あにあ金あにあ糸
 綯あの稀密あを巧あの候あとあ枝あ小あ民間あも又あとあ効あと
 天竺遺事あ七夕あ糸あとあいあ香あ花あを供あ供物あを調
 々あ座あ亦あ文あをあ並あてあ竿あのあ端あ小あ五あ色あのあ糸あをあひあてあ一あ串
 をあひあてあ三あ年あのあ肉あ小あ必あけあとあいありあ故あ乞あ巧あとあ公あ津あ根あ元
 乞巧あハあ略あ糸あのあ星あのあ葉あ机あのあ火あとあ小あ路あ夜
 稀密あちあ名あくあ公あ津あ根あ元あ星あのあ葉あ机あのあ火あとあ小あ路あ夜
 乞巧あ奠あ小あ所ありあ箏あ一あ張あをあ下あし
 庭あのあ立あ琴あ東あ北あ西あ北あのあ机あ上あのあ妻あ小あ置あ注あ延あ長あ十あ八あ年
 の例あ和あ琴あを用あ小あ裏あ考あ云あ杖あをあ立あるあ小あ三あ横あありあ者あ二
 半あ呂あ半あ律あを用あ小あ秋あのあ初あ子あ之あ江あ次あ弟あ半あ呂あ半あ律あとあ六
 樂あ書あ云あ黃あ鐘あ初あ大あ食あ初あ八あ律あ星あのあ初あ也あ七月あ七あ日あ巧あ花あ也あ
 呂の初あ之あ半あ律あのあ初あ也あ公あ津あ根あ元あ頭あ書あ星あのあ初あ也あ七月あ七あ日あ巧あ花あ也あ

藍丸あ及あ蜀あ漆あ丸あをあ合あ経あ書あ及あ衣あ裳あをあ曝あきあ俗あ子あ乃あふ
 正あ統あ四あ民あ月あ令あ郝あ隆あ七あ月あ七あ日あ隣あ令あ親あ公あ皆あ衣あ物あをあ
 曝あ隆あ乃あ作あ小あ衣あをあ出あ人あのあ衣あをあ同あ日あ後あ中あの
 書あをあ晒あとあ世あ説あ晋あのあ阮あ咸あ字あ仲あ容あ七あ月あ七あ日あ旧あ俗あのあ法
 當あ小あ衣あをあ曝あ法あ阮あ庭あ中あ爛あ然あとあ綵あ綿あとあああるあハ
 亦あ咸あとあ阮あ總あ角あとあ乃あ去あ竿あをあ去あ大あ布あのあ犢あ鼻あを
 標あたあ中あ小あ曝あとあ云あいあ俗あをあ免あとあ能あ也あ○七夕あ小
 草あ袋あをあ曝あ曝あまあとあ虫あ也あ重あ氏あ月あ令あ供あ具あをあとあく
 のあ庭あ上あ云あ文あをあおあ公あ津あ根あ元あ七夕あとあ書あ籍あ衣あ服あを
 晒あとあ乃あをあ曝あふあとあ也あ已あ生あ歳あ時あ記あ云あ七夕あ
 星あのあ初あ也あ小あ袖あ也あ已あ生あ小あ俗あ曝あをあ以あく
 嬰あ兒あをあ作あ水あ中あ小あ浮あ以あてあ婦あ人あ子あ小あ宜あ兒あのあ祥あとあとあこ
 こあをあ化あ生あとあいあ王あ建あがあ持あ云あ水あ拍あ銀あ盤あ弄あ化
 生あ是あ乃あ今あのあ人あ泥あ塑あ嬰あ兒あ或あハあ銀あ靴あをあ以あとある
 考あ化あ生あをあたあまあとあまあとあ七夕あのあ数あをあをあとあらあむ
 五あ雜あ俎あ馬あ琴あ按あ琴あ水あ浪あ盤あをあ拍あてあ化あ生あをあ弄あとあこ
 とあいあ者あハあ百あ子あのあ池あ此あ乃あ下あ九あ七あのあ数あハあ婦あ人あ子あのあ妻
 をあ弄あとありあ起あ百あ子あのあ妻あをあ以あ池あハあ浪あ盤あとあ或あと

百子池を以天河と云ふ百子の盟と云ふ者ハ非ずん〇
 謝肇淵云其女の身有指より始り武丁の妻云成
 物物兼様の浪説子成云云思謂七女牛女の象ハ
 元女男の或之ヲ人採てこれを旅一昨風流れ
 玩と云ハ可之是を以実事とありて者ハ
 男子の見わむ謝氏雜俎不見之を編り

七宝枕

晋の郭翰女ヲ青標あり月小糸ヲ庭中
 小糸織女云々傳り与踏小休憐を以て
 後七宝枕を以て留留り別を訣て去

梶の葉

吾の涙小天人下り服衣を穢師小糸と云々
 師の妻と有り年月を改り服衣を得て天上ふん心
 穢師と云小昇天と云ハ織女と云り男ハ壺牛と云
 其の再び天上ふん時梶の木のより糸を云々ふんと云
 附て与丸三星のふん小梶の糸を用ひ糸の糸と云
 又色の糸を用ひ略してふん小記を云々ふん海志かも云
 高辻章長朗詠抄云云是日小糸と云の牛女ふんの服衣
 云々ふん雜曲ふんハ似り云ハハれ搜神記ハ裁ふん亦の枝風
 の田丈樹下小六七個の女女を視ふん一女毛衣を脱り田丈

とりてこれを差と云ふ花と云ふは便りの婦となり
 志じて之女を生後毛衣を積箱下に納く之女ふんも小
 天上ふん去ると云
 草の葉ふんの葉
 糸ふんの糸

短冊竹賣
 七月六日市中
 穀の糸を賣る夜

詩を以て今ハ民間の兒女又之の紙を賣りて短冊と
 一之はたを去は條の糸ふんはびまふんく屋上ふん出ま
 こと竹竿の五練糸ふんは換ふんの紙昨今市中尺竹
 たり多ふん又近來五絶
 糸ふんの糸を賣りて
 飛ふんの糸

池の坊立花
 洛の六角堂頂法寺雲林院ハ之
 茶の香ふんあり近世の僧ふん光教

品の花枝を執りて山水の糸ふんを摸ふんるを云
 たり俗これを立花と云ふ今ふんより多ふんくこれを玩ふんぶ

例年七月七日五花数品砂の物あり法人縁寺これ
を足致しを池の傍の五花といふ三層供まのころこ

本願寺の五花

本願寺西八六条南大宮東
北池の北池の小池の西小あり

東八六条の南鳥丸の西北小池の北新町の東小あり西門
跡と稱す七月六日の夕東西の本願寺末流は五花礼
花数種を以て船の形を作り又槽の形を造り中二を
花数品をたたく門末献まを堂上に並おけ今

日七法人 七日御節供 持統天皇五年秋七月七日
公卿宴會を仍て朝服

をたまふ日本紀内膳司方これを調をま今日
索餅を用ふと板あり名公事根元今日まお

毎又地下に白帷子をまき又又まを戸と必ま
索餅を喫し或ハ送ふおおけ新索餅ハ索餅を

横の峯入 七月のふ久大寺修驗道山伏の
客僧大山寺より京不出大るに

法螺を吹丸金剛杖を振り戸を遍歴一有
料を乞ふ或ハ前鬼木師或ハ素良硫黄木の杓を

檀家小幡九峯入の法本山流熊野寺大峯寺
これを吹の峯といふ法尚山流大峯寺より熊野に

出るを逆のま入といふ 文珠會 八日 是ハ東寺西寺より
行仁明天皇天長

十年七月八日大律師兼律師のりや之縁を修む
公事根元 文珠會ハ畿内の郡邑にわけてを役

藤食亦を食ふを負ふ不能 外は是文珠涅槃祭の
文二條といふ若流生あり文律師利の名を以ん

小十二位劫生死の罪を除却せん若礼供養を以
老ハ生々の処恒に法公

の家コ生ん 大政官符略 六道系 九日 五条の末北
建仁寺聖

の角にあり今の建仁寺大昌院爰に是は孫管寺
かき云々 名勝志 孫管寺ハ法大師の開基あり元

墓場より小堂小地蔵を安置せむとせと孫管寺
この所更遠に通じ故小堂は雨より親六道に引く

出りといふより毎年七月十茶盆茶九日男女
糸訪を 彌洲府志 今日法人六道地蔵小幡を男女

証を唱 聖具を定む各枝の枝或ハ新米を以て

精霊小供 まじ 枝賣 えだうり 今九日諸人六乃にまうで
枝の枝を賣ひ家小降り
茶にわく俗聖霊枝のまじまうりまうりまうりまうりまうり
解夫を連ふのまじ六道六桓氏天皇延暦十三年
長岡より今の京に遷りまうりまうり時諸人の墓所と定む
たまふり此部記不足り源氏小桐重の文衣を
まじまうりまうりまうりまうりまうりまうりまうり
なりまうりまうり茶師如來八信教大師の他七佛茶師
のまじ まじ 清水千日詣 千日 浅草四方六千日詣 全日

七月九日方十日にわうり清水親善小法入茶詣
夜小入り茶詣終小善 今日茶詣平日の千日
小あり親善小法浅草の親善も同日の或六
にこれに四方六千日といひ或六方六百十日小あり
といひまうり文小法説なり但西郊の撰集抄七の
十六小法所謂悲華経を引くまうり今所謂悲華
経のこの文也 〇七月十日
四方六千日小 観音欲参記 王子権現祭 十三日

神社民州岩附依王子村小あり 乃乃日乃格 在り所
能野之所権現之別當祿表山光院令痛寺 まじ
詩社社説云文龜元年初濟寛永十三年
官より修造を加へり毎年七月十三日祭あり寺
中十二坊より田樂踊を出まうり僧志友雅之法師
二人甲冑をまうり小長刀を拵振小七千の老刀を佩
この外見踊亦あり乃七交まの使立く踊をまうり此れ
田楽法師の遺風歟又神代の巻に土俗此神の魂 まじ
をまうりまうり花を以まうり又鼓笛笛 まじ
用てまうり舞をまうりまうりまうり今日乃及遊
在りり諸人茶詣志取亦の老ハ竹竿を以て
陰を造りまうり茶詣に納り又社内まうり竹竿
陰を請交抄拵く家小降り亦尚院より力病病
の五香といひ茶茶を出て病苦のまうりまうり
用る小大論ありといひの遠まうりまうり地之花
山まうりまうり滝中川 崖毎 茶茶花小名あり不
動の流八成院の境内小あり石神井川ハ王子山
の林を流る梶原大進物の地枚茶まうりまうり

七

踊おどり

念仲ねんぢゅう

題月だいげつ

燈籠とうろう

伊勢いせ

小町こまち

燈籠とうろう

王子おうじ

遂すい

西人さいじん

時とき

軍ぐん

舞まい

軍ぐん

前まえ

出出

踊おどり

舞まい

注しゆ

訝がこ

戯ぎ

跳と

之これ

此こゝ

事こと

本ほん

俗ぼく

十日じふにち

毎まい

毎まい

夜よ

一ひと

夜よ

中ちゆう

同どう

そ

る

を

と

乃な

踊おどり

を

得え

そ

の

の

を

○

念ねん

仲ぢゅう

を

○

歌か

目め

を

松まつ

崎さき

又また

同どう

あ

村むら

の

女むすめ

男子おんどをを鼓こをを吹ふくく笛ふえをを吹ふくく踊おどりををままじじににままをを燈とう

篋かぶた

とと

の

燈とう

圓まる

あり

女むすめ

子こ

今いま

は

人ひと

お

且かつ

り

○

伊い

松まつ

崎さき

○

本ほん

外そと

紀き

地ぢ

差さ

と

さ

る

と

松まつ

崎さき

○

本ほん

持もち

侍し

茶ちや

傳でん

又また

因いん

書しよ

燈とう

籠ろう

筆ふで

高たか

燈とう

籠ろう

灯とう

籠ろう

切き

籠ろう

人ひと

許ゆる

九く

中ちゆう

元もと

小こ

燈とう

籠ろう

お

続つ

と

と

七

向長竿を建てて其末梢小灯笼を掛け紙を糊し
 灯を曇く遠近より此を足取流星小似り
 云云○宋の初中元下元皆燈を張ると上元の例
 の如く太宗淳和年中始く此を罷む **五雜俎**
 本邦の俗中元の夜家々燈を張る十四日乃至
 十五日或ハ終日有り世日に至り亦あり新葺の家
 白兎挑灯を出きもあり三年の後不考又灯笼
 を張らざる灯笼ハ寺院不致く光明寺云々四十九
 返唱ハ持て灯笼もおれくまを考この光を
 得るハ其云の功徳力を以成佛と致といふ云々の四
 十九返ハ卒夫の早九院不致く此の光
 冥途の闇を照して亡霊の迷を去るを

盆前

草市

竹葉賣 麻多賣

盆市

糸の俗を鼓 困扇 大小の木刀 和伊良木 三尺杖
 物取巾 俵 幣 金銀箔の紋 亦を賣致く此盆前
 必用の具也又多賣截子灯笼 盆灯笼 盆灯笼
 草挑灯を賣る此盆中元の夜長と致す又索麩

杣米 芥子 角小豆 粟 稗子 木琳 柳 菰尾 州 荷 菜 麻
 柯 矢 小 玉 菰 玉 菰 の 近 日 繩 杖 の 糸 條 竹 俵 袋 俵
 破子 芥子 加多 菜碗 水鉾 香爐 線香 抹香 芋花
 檜木を賣致 民間取美云の処用之十三日の未明
 の巷口俵と此所に商人集ひ其の認品を賣る
 此を草市といふ法人競りて **中元** 十音 脩訂記
 又子巳の刻小町りて始て市を罷 **中元** 小云七月
 中元ハ大度の月道書云七月中元の日地官下降
 人間の苦難を定む故大聖尊く宮中ニ訪一乃士
 其の日夜不離く経を誦一十方の大聖をとり其篇
 を録一餓鬼因陀もに解脫を得 ○道經小正月
 吊を以て元と七月別を中元と十月別を下元
 とす之遠小三元三官大帝の稱あり是俗妄の言也

迎火

七月十三日の夜 聖霊を定むの義ありけと此門

送火を焚く ○國人最中元を尊む家々 燈籠冥
 衣の具を掛け先人の号位を列ね多々此を燒く

女家別父母の冠服袍笏の類を具しは後不る志
 こを籠ま紗を以てその身を紗箱とて父母の家
 小送り女死色八塔赤代りて送致蒲中不る事
 八州清晨陣設ことま嚴之子孫冠服を具し
 揮舞器折きく神を導致以今糸糸く復送り
 てその身を出せ

五雜俎 孟七蘭盆

孟七蘭盆 孟七蘭盆 孟七蘭盆
 齊明天皇三年七月

始く孟茶盆を設同五年初て孟茶盆経を法
 國小下講す日本紀孟茶盆ハ是釈氏の考を述
 息を報ひ苦を救の要より同蓮の母をその身を以
 始とて梵語ハ孟蘭此ハ倒衆と云盆ハけ方の
 然也 釈氏要覽 同蓮比丘の母の餓鬼中ニ生じ
 をえく即ち祈を以飯を盛仕くその母小餓を食
 けむ口小入ど化て火炭となり終て食を食を得
 て同蓮大ニ叫びく地還り佛ニ白む仏の曰汝が母罪
 重く汝一人の力ハももを致亦あむど當小十方の
 庇傍の威神力を乞ふべし七月十六日小祈當に
 七代の父母祝立の父母厄疑中不む致と云る百味

五葉を具て以盆中小送く十方の大徳を供養
 一佛庇傍を初て皆施之の乃七代の父母を呪
 致一祥定の言を致しわあく後食を交よこの
 時同蓮の母一切餓鬼の苦を脱と致とを得しり
 同蓮仏は白と永く来世の仏子孝賢を致す
 又孟茶盆を奉て介と致とを得さむべし可
 ちんや佛の言大ニ告故不後代の人ニ此に因て廣
 く華飾をなす乃本を刻と竹を割始燭燭糸
 花果の形をなす工巧の妙を

聖靈まが利

極致に至る事文類聚孟七蘭盆怪
 冥糸 魂棚 聖冥極 棚終 盆の旨
 十日より十六日ありて家々棚を張先人の位牌
 を列ねらむを魂棚とも聖冥棚ともいふ其の冥を
 つ致と冥糸ともいひ又天聖冥糸ともいふ其の冥糸
 を公の靈被子久かひ小裁菓餅香花を供して
 こまをなす又行糸を祈中ニ布花尾草を以水
 を灌注着流り冥位を祈きその祈を謂て冥向
 祈といふ其の家門の傍流り牌前小幡経を

これを棚経といふ京の俗の方糸を中用するの三方糸を公々堂といひ倍木をうんがかけといふ○謝
 聲謝云孟婆多を八目蓮の母餓獄中へ堕入の
 故不同この切徒を設け法の餓鬼をて一切合を
 得さむ人の祀考も天堂示せり極楽世界小生
 されしをて吊りて餓鬼を以てきたり思ふを
 といふ五難姐 五難姐といふが如く冥まりを吟
 生御霊 行の飯 刺鯖 文明八年七
 月十日云云

内若宮方公郷方以下有法祝之儀いさみたま云云
 親長卿日記 生也又といふ文明の云の成りなり
 といふと云七月の多小亡之の冥魂をさうりて
 現在の父母足跡なるの生也又を祀するなり○
 の俗七月より八生に二親を供養して生也魂と名
 つく是も孟婆多を之の終行へ盆経云云致くハ現在
 の父母をり壽命百年病なく一切苦悩の患ひを
 らぬ云云是七月十日倍自恣の日現在の父母を令
 長久を祈る勢勢の文之 團圓倭筆 ○蓮の飯と考

此の冥小供下又親戚の家を掃くことを生也又
 と名づく行の多を以てする掃飯を包と致す州を以
 て此を掃くは名づるは秋 和三七月十日小
 人家各掃飯を符系小畏を鮭をのし小我を
 親戚の同互小お掃りて此を祀するにせ連の飯
 といふこの月と云へ鯖魚を賣る鮭魚一雙を一掃
 といふ一魚飯を以て一魚飯 七月朔日より十
 の内二掃む飯刺鯖魚 奠土糸 八月にありて各
 祀考の墳墓示訪るは是唐山人清明の日上墳
 糸糸掃の礼と同ド○源の災家糸糸七月十日分む
 といひせき山寺にまじりて此ののるを以て蓮の
 糸糸を心ろと云ふおく小我はささけり是を蓮の墓
 糸糸○伊勢の古里にて家入る杖糸糸の糸糸を
 糸糸

三井寺女詣 江長等山崇福寺 又蓮
 地福院ハ大洋の例小あり
 園城寺又三井寺と稱せ宅宅城寺ハ神園小隣を
 以名とす三井寺ハ西巖小泉京あり天智天長地流
 三帝即位の時この井の名を祀り浴湯に献つれ

因之御井といひ後改て三井小作是之皇の浴井

毫華三會の事この寺平日女人結界の山只七月

十又月女人の糸務を許し堂せむことを

女務といふ當山六智證大師因縁の因基也

佛者四月十六日より七月十六日に至り一夏九旬の間他

の化差の乃小聖経及名月歌目を書写し夏後子の

後これを堂塔に置し納め三思万矣小回向をこと

を夏去納といふ俗

子も又この夏解草

檀越に遺取をこと交解草といふ今この草を詳小

多小己小五分法身の度とて故小吉祥と名づく

親氏要覽四時一色泉原の下小生と山邱の人以瓶

小挿して視る先小落字ありといふ葱翠草なり

多と家小吉とありといふ花を調く故小吉祥

草と名づく

字彙天和本草云交解草ハ夏門冬の大正取をとり

寺小あり當寺ハ華人芙蓉園元

水灯會

六月 城州宇治郡太和田黄檗山万福

殊禪師明曆中の建立之今夜宇治川の河中

これを修む水中施會の法事之の式船二艘を双

申の刻斗小圍屋の舟小土先流し折りて宇治橋の

下小玉り多小及く船中数々の灯籠を兵下俗流

左右小度と列ね七如来の牌を舟・供物を備へ經

巻を福し音聲をとりて流し流し下取去りて後

三日六十個の燈を宇治川に流し流し下取去りて後

散礼をむ信堂火の如く一の灯白紙を以小蓮花

を造り内文心を堅く熱文ハ燈籠を以煮る火

をその末小兵下たきハ或ハ流し下取去りて後

橋の下に玉取のあり俗流の刻をう小岳屋の

前小玉り○南國の風俗中元の夜家戸各美飯

を具し齋供を門前羅或ハ垣衝の所傷亡の野

鬼を祝祀し早て燈を水燈二千六を掲げ流水

向く流め云々各つけ度紙と

照冥

月令廣義

大文字の火

名辰火

船政の火

妙法の火

○七月十六日今夜東

山淨土寺の山と形を以大字を長とこの字畫凡
 筆の及ぶ小あひつ傳へし至所家製昌の目を
 拾記のありきを長とひ及小一条通を二面とこと
 一説に延徳元年七月十六日相國寺補横川和尙補之
 乞將軍義高追悼る之九月六日より薪を伐息火
 を以て小石をその下敷くその數十家あり今日申
 の刻各伐り乾とりの薪木を拵ひ山と小堂を九六
 文字一畫長百五十間余五尺斗を隔てサ新木を
 積と二堆々の數四百八十余所各薪を積て後
 日の没きを待て何時火を息とこの外北山松の傍
 小妙法の火を長と松屋山小松の形の火を長と堂
 岩山小八名居秋の火を長と洛外の山岳并に
 系野法入集て栢麻の條の枝破子公の堂の數
 を燦くことを聖美の
経木流 其日 揚州四天
 王寺の東
 傍傍の小島井の水あり其名白石玉の水也
 けむり白河法皇の上東門院の寺に流す時その
 水盤小島の形あり其水を白石玉の水と名す

亀井の水と海とことその号の起致とことなり
 澤の亀井の水をむとびあけんの其をすはつら外
 七月十六日世俗経書堂に於て經木の表の法名を記
 この水をは向て灵魂を吊す **撰陽群談** 青月毎に
 六舟の日誦堂に於て終を補す系防の戒名を名す
 小記に同向すとし和泉武に系防のと名を名す傳ふ
 去りて福を祈ふ梓弓とつらとしハととしては記す
 のうと入る於今の經本の名傳の述す也○
 江戸の傍俗七月の中に船中に彌經一經本の志を示
 の戒名を記す夫を流水中に投すこれを川に施
 做鬼とは是施す做鬼と通覽の本を撰す其のなり
 又水滸傳に記す水の水陸堂
 ハの方にハハ施す做鬼ハハハ
閻麻鬼系 十六日
 閻羅王ハ地獄の主也鬼官の總司也 **俱舍論** 閻羅
 此ハ不慮とし **叙氏要覽** 瑛ハ魔也ハ瑛羅此不靜
 息と統と **翻譯名義集** 冥府の十五ハ分ニ奉養
 王才ニ初江王才三宗帝王才四五官王才五瑛魔鬼
 王才六變成王才七泰山王才八王平等王才九都

市王才十轉輪王世俗十王のち爾王のあはれを
 ありて九王の名を知らず稀に七月十六日を天沙
 日といふこの日皆の身を供へ奴僕も服をさへせ京
 小千子の岡十堂多る江戸小千赤坂心法寺
 浅草清光寺長安寺赤川寺町賢法寺世俗の
寺を官
 十堂牛込平川寺の八幡安居の頭十音安居
の頭
 大経管へ故三年己おのの政人を指長と先前
 年の十二月朔日より翌年の十二月十八日小ありて
 八幡山下の郷家安居の政を勤む郷家八村屋中
 の長をその土地の中より此氏ありとて又十二
 月八日今日石清水安居政人の宅小放り連所
 小細の祿人長吏の補任を授けしを指長也
 又十二月九日政人の宅小放り郷家元を丸食
 意に能拍子ありとてを右那志といふ尾小習
 礼の祀り又十二月十二日政人丈母松山を勤堂を
 赤毛ヶ坂商を修とてを松毛とて又十二
 月十三日政人海衣とて七所社系一奉幣

あり政人の婦も又これ小儀事郷家烏帽子淨
 衣を忌み供を以ての行粧を右凡之放生河小
 橋ニありハ安居橋と号く是安居政人の後を橋
 なり常に浄の人を禁む政人これをもて是也
 今日より山上おぬ政人の社傍の坊不止翁一精
 進潔翁とてこの間西郊桂の里の女子孫夜叉
 白布を以政後をつとまりて桂胎を挿ぐこれ
 を桂帽子と稱す今糸の童謡小兒桂帽子
 是之十二月十日安居政人夫婦社系本社の前
 小大なる松一本建て白布二疋をその上下の枝
 又か多人を引候小儀のやねをてての松に
 せいのりけ布の枝を伐り携て政屋小海に後代
 後政の敷とて今七月十日を以十二月十日は換
 安居の政の事あり
 善福寺童相撲正月
江戸
麻布
 雑色町小雨の麻布山と号す世俗尚書を麻
 布と稱す閑山了海上人の親書上人の弟子之
 出書山了海上人の天台宗を了海上人と九四百余年

のたれととの親曹上人常陸の碓氷方為宗の時
 出雲寺小寺宿あり浄土法向のうへり浦位依あり
 て親曹上人の弟子となり一向専念の行志となり
 了るま宗の道場小ありむとの七月十五日ハ了
 上人の忌日今日寺内ニある所の麻布袴袈裟社
 希ひて童お撲あり
 祇園のころなる一
 祐天寺千船十五月分 明顯
 天寺ハ江戸鎌倉小あり開山祐天大僧正たり例
 年七月十五日より正月と阿弥陀佛子口修終この
 最系詣
 衛突入昔ハ法圓して法と入とて家
 おはし
 家の嫁娘喜妻まき常はるる知とよ相と客
 致展間工限り以休く入て惣小尼之遊習ま
 勢沢山田あり西急世人山田のつと入とて根て家
 成從教を重むる八合負役の道が致成これを職梅の
 る小尼也といふ七月十六日なるも今このり絶てり
 小ひ
 新綿七月十六日内裏貢の綿云 藤波州
 新綿とハ蚕の綿也蚕の繭夏月に

孰く秋初玉綿紫を物と云ふ
 新綿といふ説小本綿也秋と云ふ
 御雷の山出
 清光の社ハ六束極の小西小あり下ハ京極大炊の山
 門の小あり社ハ久八近湯通新町あり上所美ハ
 京極の西書堂寺の北あり上下山夫の社毎年七
 月十八日清光八月十八日祭礼あり神輿二基ハ所美
 八所ハ崇道天王伊与親王吉備聖霊後大夫廣
 徳後系夫人橋建勢文倉宮田凡火雷神なり
 世ハ火雷神を謂く世家の天とて致意ハ保り之
 傳り云清光八所の内四所ハ桓成天皇の御時これに
 勅傳り下の四所ハ仁明天皇の御宇これを勅請
 せし出雲寺を上下所美の神宮寺とて下出雲寺を
 下の所美の神宮寺とて傳教大師の筆刻りて今
 古寺とて小絶り寛文中章中慈眼大師の遺戒
 小あり久遠壽院唯旅山城園宇法教山科の
 今小絶り出雲寺を再興一ハ毘沙門天を安
 重きとて清光の社あり是古を存る所の遺志
 なり上下所美の清光八束極通中堂美小あり下清

七

其の氏族八年くその所を定めむその年神事
既の族内不安を以て氏族所を以て氏族と稱
す

夜鳥の羽出 鳥屋ふむと八月を小入るる
四月八日不入り七月十日不入り河津等とす
一説小波形國より出ると又説とす字を
たふとより程と説あり西園寺殿首書
四月羽毛
將小鳥らんとと説とて帝清を解去り鳥屋の内
不放つ日を逐て脱して又新毛を生下り七月
中旬小鳥の如しこれを片毛とす二歳毛を易る
を兩鳥屋とす三歳

夜鳥の山別 七月五日
を兩片能とす和
夜鳥の巢を立て父母小鳥を以て○夜鳥極悪の
の鳥の子を以て鳥小あり鳥の子成長を以て鳥
親を食ふの意あり父母を食ふを以て鳥小巢
より一尺去り子を以て鳥小一尺秤を以て鳥秤と
す

下鳥集 夜鳥の山といふ是言山に夜鳥を以て
足高明神ハ傍後明神之鳥の所也との山を

始ふ二條基房卿鈔 恒山之鳥生四子羽毛既成將
分四海其母悲鳴送之是往而不返也孔子家語
一説小九夜鳥を以てハ傍後明神始め鳥小
七月の沖後山を以て訪以因縁ありて八月小巢を
秤とす○仁使帝の時依網の長念の阿海を
具名を捕りて以て長念毎小細を張るを捕小
鳥を以て是鳥の類を得て以て鳥小とてこれを
献て帝酒の君を以て鳥を以て鳥小とてこれを
以て鳥小とて鳥小とて鳥小とて鳥小とて鳥小とて

酒の君ハ百濟の人なり
夜鳥 七八月の鳥を以て
以て鳥を捕るを以て
全信とて鳥の雛を離れて飛翔するを以て
飛鳥とて鳥小絶崖断崖の喬木を度る鳥の

七

この所を六地蔵村といふの後保元二年平清盛六の
 小堂を造りこれをまらむ七月廿四日供養西光法
 師これを与り今亦ありて七月廿四日供養西光法
 師を地蔵系と云洛下の児童も又各香花を街僧の
 石地蔵に供てこれをなると今日六地蔵の徳も亦六
 西の堂に諸大鼓を懸を鳴り以誦念講をなす
 俗これを六地蔵と稱し洛東光福寺(干葉)の二流之
 ○江戸でもこの日六地蔵并に其堂を祀奉(干葉)

伊狭山系 正七月 伝説諏訪那須訪明神の系
 此の諏訪八坂入娘命 今在記或説此山系八坂入
 神殿を造り其の外人家も系礼の向八坂入の穂子も
 造り又此山系といふ其の正日本紀才一少野槌の神小八
 又百箇野薦の八玉籤を採りむ是八天照太神を天
 の山戸より出りしと云時時此山系より伊狭諏訪之
 系も亦此山系を以幣と云故小系と云外伝説と
 もいふ或伊狭記より伊狭系小八遠笠をけを射て系
 といふ此山系八坂入村の軍の輩の高丸を代人たむ小

伝説國守此の神に祈り小提の系を射り
 正伝説八坂入湖の波亦馬を走ると此山系射り
 了と云今此山系射て神も此山系此の所以なりて
 穂波とも書く此山系と云り縁起正此山系相
 伝の伊狭田村將軍の建立といふ此の神八坂入
 田村の系を **穂屋** 伊狭山系に造り後此の
 系なり **系貞** 伝説六八月之深沙
 系小八七月廿日と云揚山井八七月廿七日といひ説
 多一廿七日小系(干葉)秋ひ初初使をまらむ此
 穂家といふ初使も敬の系新小使家を設け
 今もその系凡そ穂家を造りて新式秘抄に去
 穂家といふ八坂入系系正の系と云系八系小七系
 度あり是の系と云みさ山八坂入系取の近所と云
 説ありと名所方角抄秋秋の夜是亦系伝説
 と云春兩抄二刈りほと云の系と云 **角能** 漢
 系小八系系と云やみらるる系

郭領使 万葉 ○ 重相撲 此の角力
 ○ 兩相撲を力を投養射野不能

公事小あまは方おもわすの冬のお櫓の敷こた
も内裏の角力不准ト秋とま九お櫓の勝負を定る
者を引司と云々の法之流あり播州東坂本西園是く
又お櫓の射首を圖と云次を戻取といひ又その吹を小
結と云ふの余ハこれお櫓といふ是今の櫓の松鳴り

角力とりたぬややのうふふ 山風雪

紙治子そこらひもさうや辻相撲 奔居

鳩吹 あつとまきえとよふもひを合せて吹くと鳩

吹といふは鳩の鳴く小麻の声の似る也冬文

秋ともよめる麻の秋ハまきえとよふ物おれハ麻とて

笛少く麻の声をまねがて我らうもそて侍とのあ

之 奥義拙 鳩ゆく秋は仲実かちん 物まきえとよふ

わて鳩のまねをまきえ 八雲 物人の鳩をまきえとて

身を合せて鳩のまねをまきえ 哥林良材 鳩

まきえとよふまねをまきえ 又麻をとる附のまきえ

藻汐艸 秋さうりになまきえ 人鳩のまねをまきえ

せそ鳩の声のやん吹かき 袖中拙 法説此の

わいといふも是末なり 又一説 不鳩吹ハ有るをといふ

まきえ人鳩のまねをまきえ まきえまらむけハ有るまきえ

まきえまらむけといふは説き 亦経巴説 不鳩ゆ

風とて西風をまきえ いふ今按 不鳩ゆ

まきえ まきえまらむけ 鳩のまねをまきえ まきえまらむけ

花火 まきえまらむけ 鳩のまねをまきえ まきえまらむけ

扇おく まきえまらむけ 鳩のまねをまきえ まきえまらむけ

稲妻 稲のまらむけ 鳩のまねをまきえ まきえまらむけ

糯米 稲のまらむけ 鳩のまねをまきえ まきえまらむけ

田畑 稲のまらむけ 鳩のまねをまきえ まきえまらむけ

楓 稲のまらむけ 鳩のまねをまきえ まきえまらむけ

七

秋 蘆荻あし 秋 糸秋いとあき 秋 萩あき 秋 萩あき 秋 萩あき

○まど萩ハ葉の細ナク
を以萩の戸ハ禁國中ナク
麻鳴草あし 芳子あき

芳宜草あき 和名 萩ハ蒿の属ニ多クも誤リ
王引ト久一〇古枝草〇紅艸

○花ち草〇月天草〇ね草
毛草あき 以上萩の異名ニ
秋海棠あき 秋蘭あき

橘梗あき 和名 萩乃比布木 和名抄
ちこり〇阿羅乃比布木 和名抄

牽牛花あき 藤をわさふとよハ強ク草ハ木属
云牽牛子此田舎ナリ九人ノ人
とリ外を牽て葉小見易故不名

女弟花あき 文集
茶花あき 仙翁花あき 観音草あき 公卿草あき

茶師草あき 牙切草あき
本草ハ白萩ハ萩ハ草葉の
トク花ハ槿小似ナリ 本草

茶師草之付ハ花ハ帝の朝不存烟あり花を晴れと
以之の葉小精工懐林の如ク香潔トありハ一葉を採
て以之小傳之病愈秘してこれを傳へば家才あり
秘小之を減し晴れ如ク家才を殺さす小放
人智の良薬を知る也

青茶あき 牙切草之香子用
ありその草を牙切草と号
ありの長たはハ一

鳳仙花あき 益母草あき 旋覆花あき
定家又云あり

野菓あき 樹皮金の花あき 若菜の花あき 冬花あき
千柿ガ葉遠縁小云嫩ナリ蔓草小花紅ク色白ク内
微リ紅ク葉付の方をよみてハ豆或ハ秋小長ナリ
さうがハ冬の水ハ小見故不名の
花を牙小長て交小槿を名

曼珠沙花あき 枇杷の実あき 金桃あき
日本金桃あり其
実重斤 述異記

木桂あき 俗これを
黄苡仁あき 蜀漆の花あき

七

七

七

七

七

七

木此の實 蓮実花 槐花 栗 刀豆

洪柿 新洪 夕方の実 青瓢葍

百生かきたん 狼尾草 去て田小あり小守田

千はり瓢葍 庭の柿の 栗の苗の 穂の穂の出

栗の苗の穂をとりて時 穂の穂の雲 穂の穂の出

穂の花 穂をいふ小やりの花の穂小穂をとりて

以上穂の 穂ひろ 穂の穂をとりて

穂の穂をとりて 穂の穂をとりて

穂の穂をとりて 穂の穂をとりて

穂の穂をとりて 穂の穂をとりて

穂の穂をとりて 穂の穂をとりて

穂の穂をとりて 穂の穂をとりて

穂の穂をとりて 穂の穂をとりて

穂の穂をとりて 穂の穂をとりて

穂の穂をとりて 穂の穂をとりて

穂の穂をとりて 穂の穂をとりて

穂の穂をとりて 穂の穂をとりて

穂の穂をとりて 穂の穂をとりて

七

冬入冷良寒肌心爽氣

月の霜月の雪 月中小桂あり

月の氷 高天原下より

人あり常小これに祈る樹に剣及び合とての人姓ハ

異名ハ劉西河の人仙を言ふ過ありて滴を樹を伐

桂の花光を以て雲御抄

桂の光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

桂の花光を以て雲御抄

七

立待月 十七夜之瀟沙州一鏡立待十七夜まら

暉素 月光之

金波 前漢書金波

月生魂 尚書十六月之

既望 日月既望心之望と

在明 十六日以後の月匡房の生生傳あり

玉兔 素日抱去鳥

銀兔 清露冷浸

於帝臺 謝莊月賦

玉兔蟾蜍遠不知 白氏文集

玉兔蟾蜍遠不知 白氏文集

玉兔蟾蜍遠不知 白氏文集

玉兔蟾蜍遠不知 白氏文集

玉兔蟾蜍遠不知 白氏文集

玉兔蟾蜍遠不知 白氏文集

玉兔蟾蜍遠不知 白氏文集

玉兔蟾蜍遠不知 白氏文集

玉兔蟾蜍遠不知 白氏文集

玉兔蟾蜍遠不知 白氏文集

玉兔蟾蜍遠不知 白氏文集

今日不死為妾月精の女地供を修と十七夜小八三
待と称す月のおもを供せりておと次よりり

居待月 十八日
所待月 十八日
藤原氏若菜下 永徳のころ

ねまら姉待月 八雲源氏若菜下 永徳のころ
るまの元月と字敷きてしるまの元月と月此外ま

も後月の月八の月と云ふ○外まら月を八を小八
月と称されし月も厚月よりて元月小八を八を

なくはとも月の百を敷きて十九日の月なり 桂明抄
又一説は元月十九夜月の赤赤縁付ともいふ

元月 元月の月ま 更まら月 元月の月
の正刻に出 藤原氏

常娥 羿不死の茶を西王母小婿の姮娥竊と
服して月中小走す 淮南子 嫦娥の羽か

走るを蟾蜍といふ 天文志 真如月
喜ふ不死の茶を偷て月中に 走るを蟾蜍といふ

雪外の月此抄 法花云義 元生 天如月 常小娥
挿す白くも月の色も少く清くも清くも月

捕まて月の竹の常小婿の姫なるが如くといふ
去地の月といふと不死の茶と云ふは月の茶なるを

去の故に切妻類を離すと不死の故に我他彼此の是
列す 心の月 挿す 共に清くも清くも

観相我心月輪上有
梵字十 不盡の歎 意の光りてとてとてハ秋

八道行用 たゞ一妻の月を挿す 痴傘
月の氣 黒白の二氣あり互小樹根を繋乃至樹

根小命小命(黒白の二氣ハ昏夜ニ命小
確言喻經 之常の喻小人虎小逐れて野中の井ニ陷

らんといふやの毒を望み屋をえんハ毒蛇を食
て飲んとて又黒白の二氣の多くこの毒の根を食

ふせんとて毒根の多き毒を食るとは虎ハ
平生遠西の罪業黒白の氣ハ日月の二氣といふを

月の氣と云樓炭 月の劍 之日月の形を刀劍ニ

経れ文々 奥義抄 元とて又満月を
たゞ一妻の月を挿す 羅公遠 関元中

月の都 月宮殿 元宗は侍て宮

七

けりきまらせりてのあやや○越布色の漢中ぬき西行
漢のふまきまきの小見拾ふそらの漢とあはるあは無

名くづ 葛の葉 忍草
忍草と名同言なり
桂の葉と似るをさあふ

葉とよひつるに似るを忍草とよふ者これとこの
葉の形をよをたつねて詮じ一草二名このふ
あて並べ 言國疑抄 大和物語の忍草同物と
いり但つりつとあはれ八日まはれ葉之葉平がこはるのふと

つらむ物あつて八雲星のあつてはつてはつてはつて
國府洞まの口まのふしつてはつてはつてはつて
之今まを盛てはつてはつてはつてはつてはつて

草花 色草 野の花 芭蕉
秋の子 野の花 芭蕉
おれ

兵衛州 雞頭花 茱萸 屠耒紅
けいけい けいけい けいけい けいけい

鬼燈 番椒 若烟草 東埔塞瓜
あつてはつてはつてはつてはつてはつて

布匹 南凡 冬凡
かもし毛種のか名ん
この凡冬と凡冬と凡冬

毛あつて種あ 狗尾草 薑
あつてはつてはつてはつてはつてはつて
あつてはつてはつてはつてはつてはつて

蓮芋 栗芋 芋魁 芋の子 青芋
水中の生 蓮芋の一種 つくねい
あつてはつてはつてはつてはつてはつて

長芋
あつてはつてはつてはつてはつてはつて

零余子 黃独
あつてはつてはつてはつてはつてはつて

牛房引 菓 榎の實 園栗
あつてはつてはつてはつてはつてはつて

柿 烘柿
あつてはつてはつてはつてはつてはつて

十夜柿
毎年京都の法中寺の法堂十夜の法中
盛に終る故この名あり法柿を以石灰

青梨の種
圓梨 梨の種
種丸梨 水梨 梨の種
梨の種

空閑梨 肥前の産極めて大之也
少く赤しその味ハ酸梨

妻梨 草生の浦仲熟しかつ
小枝をこきり海り

山梨 全
なりといふを以て
ありのものと味ちや

鹿梨 鹿の肉を以て
鹿の肉を以て

新米 新米 今辛米
新米 今辛米

田の庵 田の庵
田の庵 田の庵

小田 小田
小田 小田

鳴子 鳴子
鳴子 鳴子

鳥劫 鳥劫
鳥劫 鳥劫

引板 引板
引板 引板

弾 弾
弾 弾

紫字 紫字
紫字 紫字

傳燈録 ○いかに皇の世人を権擲殯葬せむと包
小白茅を以てこれを中野小投孝子その會歎の會
をまじく忍びて彈を作りこれを古り會歎の害賊
防く按ては彈ハ紫字なり田圃の中草偶々をうて
弓を拵りぬ以て會歎を劫せむ此れ○仙中願湯川寺
の玄賓僧都迹を民間の奴とて今まひりてを菴を
ちり菴菴を發してを以て紫字と今まひりてを菴を
發して會歎を傍如と云○和○鳴子引板ハ多花未
ると丸繩を以てこれを引く時て名を發して又万葉
拾遺抄引板よ末を流し繩をつけりから一庵をお
とらむとめどもつり○鳴子ハ躬恒秘意抄云梓の
先ハ鳴子を以て片山里ニ西米といふめを以て猿を逐
りてせり○そほつハ古今蒙雅抄云田のおとらへに
も久形とつり或ハ添水など書ハ後の人のことと云ハ
そほつ或ハ曾富澤などあり

燒帛 馬の尾を獲て
田小弁と云麻

和 和

七

人々の歌と傳つ膝へその英云
を以てとのるものとなりあり
原小夜虫 和布のり
なまや月

たる小沛老中よりありとを以て勢語註
を以てとのるものとなりあり
名つた之を深草に約云ふは古くは
なまや月と深草に分て殻の一片多
和本草 已れは六雜之
と云は秋なり 増山井

ハ先づ出晴ると夜啼く或は結と雨
て百合と云ふ蟲冬と定を以て雄と
及小郭璞云云 蛭刺土精之心虫文
鳥冬冬小睡これ今小見陰腫る
物小吹くこと経験方云云 蛭引
人を吹形大風の如く眉鬚皆落

父也 是之の男の言と云
鳴 正字六龍鳥一
田鳥と作る今
俗混合と略と和之云云 西十八
○ほと略 ○狗黒略 ○黍略 ○黄脚鳥 ○京時

○羽羽略 ○杓略 ○山略 ○遠音略
○木雀略 ○草略 ○草中略
○八羽を揮王の土を以て之を
曉の略の羽の如く思ふを以て
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小

○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小

○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小

○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小

○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小

○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小

○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小

○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小

○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小

○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小

○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小

○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小
○鶉 淮南子 鶉小鳥の如くあり形小

七

きて波のぞく樹のなを觸雲といふ今の女房相
 小い子をひきかたとい彼が肉の色をうらやまを
 陰にうたれを葉まわれ葉の葉まわれ葉まわれ
 略しておひきかたとい後の人へさして出の字をさす
 めさうと六やうえ今の月八何 鱈又鱈 魚確
 るしひすうなりねとあおほひ 鱈又鱈 ありて鱈か
 一粒を以鱈魚小漫と時八の子を鱈魚
 鱈魚小漫と生と故小鱈鱈とい 鱈鱈公雜録
 万葉秋七種の菰ハ萩 尾危 虫撰 世誘同義
 菰の菰 菰子 菰花 菰袴 蟹 虫撰 去交茂
 菰のそと虫やをけり八何のふ小交茂より生けりふや
 菰は八教上人の道遠と昔教上人の源藏序を
 とへひて虫を菰子とて今もてけり八何川院
 の所時より始りな虫撰とや昔八交茂の社司
 なふや作けりけり八何のふとをさるるや 故律同
 の位らけりともさるる昔八交茂より出けりともさる
 合せけり 堂上の虫やと九月の位
 合せけり 一やまうて三秋のふと

八月

八月 八月と八葉菰の月の略といひり
 初月といふと初来とと厚の初て来
 たり教らちなるやいり又とさるる八月八の字
 をその考もむ八何のふといは説小考とて

南呂 律 白露 節 處暑の後十
 五日斗庚に

秋分 中 白露の後十五日斗
 二雨小ささとをいふ

仲秋 月 竹春 筍 壯月 纂 中高
 要

中律 出所 難月 全上 唐教函八月 難
 未考 一と秋風と達とと

あり雛月 種風月 王 月 上 燕六月
 の張り鳥

雁来月 八月 鴻鷹
 来美 月令

八朔 八朔梅 特怙の節 馮氏常供
 たのこ せうく

鐵の甲を以て護る所造り或ハ糸紫を以て金灯籠を
製ス又鉄を以て葎を造り葎の實をとりて熟の形
を作桃仁を刻て松皮を作り亦葎を以て仁を枝るが
ら打てり器ともにお務京の俗を祝ひ物とす

○八月朔日を饗とす俗
天中の節 八月朔日
の日の節

可い以前小天中節赤口白舌隨節滅と書て戸
小押と云云拾遺鈔陰陽秘法云いり大國の后
天中樓小於事ありその人素懐を遂る小より忽火
神となりて天中樓を焼付小后呪て云八月乃至隨
節滅云云傳い凶悪日之陰陽家天中の札を以門
戸に貼て道方と云月一日を
三村祭 三村或ハ水
村小作泉

州堺南の庄陸元の下条岡に村小あり後吉日記云
多の神伊弉諾のそ此水子奉勝食擲國長徳之後小
生玉牛既天王を合せ系乃住吉の外宮とて故小
朝廷より七年小一度住吉の社造替をなりし時
尚社もこの系あり社地元岡口村本戸村本村の間

俗三村大明神と稱し大寺祭と号す○密宗山念
佛寺ハ聖武帝の所教よりく初基の岡基之社
八十石泉州府志例系八月一日二日を三村祭又大寺
祭といふ本戸村岡村原村の本居神あり大念仏寺

の節
壘天神祭 三日泉州堺常樂寺の天神
像ハ菅神大宰府に在

き日自化り多七軀の像れらちといひ傳ふ社傳は
長徳二年錢統正月海濱小漂ひまふよりけ小
に安置ス或ハ昔陸元の郷湊村小あり故小陸元天
神とい申と北の庄は勅齋と文明二年菅系系長
之の記云和泉國毛瀨津井草部土師向井湍元
高石菅家の氏神天穗日の命以來の旧儀ハ
五條祭ありと云をともく其陸元天神ハ天穗日命
なり後ハ菅系相を合祭す欽泉州府志例系六

月十一日を其神祭と八月二日を秋社とすこの日
系詣事ハ神輿堺七道濱おなが夷嶋渡所即
日還幸ハ先按徳抄四と七野祭 曾一條帝
志とす今ハ三日といひり

⑧

年八月五日祭礼也、女帯あり後冷泉帝永業元年八月四日定、五日ハ母后の國忌よりて社注式北野系今ハ四元ハ五日先例大長より始、

綱云奉儀小至、大段と称ス、俣りあり料米六十石拾其秋、多神立座中ハ天満天神東ハ中将殿、

西ハ吉祥女（昔家）の西方教の西南吉祥、此ハ後多ハ所名なりこの祭主、其藤下立賣の西所、旅所、其同、上余町の地、蜀錦を布供、其の軍、綾羅の袂、をつ、ね、管、弦の、声、雲、井、の、号、

多、今、當、社の、旧、記、あり、也、也、**白**、**髪**、**此**、**開**、**帳**、五、音、

近江、亦、不、風、自、祭、大、明、神、ハ、猿、田、彦、之、神、祇、正、室、此、レ、比、良、明、神、と、同、伴、之、社、説、昔、ハ、開、帳、あり、元、祿、中、より、止、む、今、ハ、只、内、陣、を、用、く、宮、殿、を、あ、き、し、も、の、也、

之、四、月、上、の、辰、巳、祭、礼、神、輿、渡、所、あり、往、古、の、神、門、石、橋、の、邊、今、水、中、二、町、斗、湖、水、の、沖、は、な、り、縁、記、も、と、も、名、屋、の、あり、し、而、を、務、川、村、と、同、社、取、り、上、町、あり、河、あり、務、川、と、号、し、け、川、の、坂、を、務、川、と、号、別、當、を、白、飯、山、延、命、寺、福、壽、院、と、号、毎、年、二、月、八、講、あり、因、帳、ハ、

八月ツケ、**敦**、**賀**、**祭**、十日、氣、比、大、明、神、ハ、越、前、因、敦、賀、祭、郡、小、町、氣、神、仲、哀、天、皇、風、土、記、云、氣、比、の、神、宮、宇、依、日、伴、之、八、幡、哀、神、天、皇、の、無、祿、氣、比、仲、哀、天、皇、の、祭、例、系、八、月、十、日、今、月、二、日、至、近、因、上、里、四、方、の、法、高、人、教、下、師、也、師、ホ、来、り、集、り、二、日、神、輿、洗、り、敦、賀、紙、屋、町、と、い、ふ、り、例、年、紙、細、子、家、基、竹、籠、を、出、し、京、の、祇、園、囃、子、成、摸、と、二、日、神、妻、四、日、を、後、宴、と、称、し、町、の、氏、子、東、番、西、番、と、い、ふ、山、を、出、し、地、車、を、町、中、を、引、出、し、山、の、上、二、丈、斗、の、松、を、立、四、方、錦、繡、の、邊、幕、水、引、ホ、洛、の、祇、園、系、の、山、如、し、上、二、氏、者、人、形、を、飾、る、山、の、数、或、ハ、五、或、ハ、六、祭、礼、當、日、は、こ、れ、を、出、し、天、神、の、表、と、い、ふ、清、籠、を、神、輿、持、行、り、月、十、日、之、待、宵、これ、を、小、月、と、い、ふ、**名**、**月**、今、宵、の、月、十、五、夜、三、五、夜、是、月、月、見、仲、秋、十、五、夜、の、月、を、待、て、中、こ、ろ、ち、和、漢、と、同、民、同、今、餅、を、割、し、同、答、は、芋、と、枝、豆、と、を、

八月ツケ、**敦**、**賀**、**祭**、十日、氣、比、大、明、神、ハ、越、前、因、敦、賀、祭、郡、小、町、氣、神、仲、哀、天、皇、風、土、記、云、氣、比、の、神、宮、宇、依、日、伴、之、八、幡、哀、神、天、皇、の、無、祿、氣、比、仲、哀、天、皇、の、祭、例、系、八、月、十、日、今、月、二、日、至、近、因、上、里、四、方、の、法、高、人、教、下、師、也、師、ホ、来、り、集、り、二、日、神、輿、洗、り、敦、賀、紙、屋、町、と、い、ふ、り、例、年、紙、細、子、家、基、竹、籠、を、出、し、京、の、祇、園、囃、子、成、摸、と、二、日、神、妻、四、日、を、後、宴、と、称、し、町、の、氏、子、東、番、西、番、と、い、ふ、山、を、出、し、地、車、を、町、中、を、引、出、し、山、の、上、二、丈、斗、の、松、を、立、四、方、錦、繡、の、邊、幕、水、引、ホ、洛、の、祇、園、系、の、山、如、し、上、二、氏、者、人、形、を、飾、る、山、の、数、或、ハ、五、或、ハ、六、祭、礼、當、日、は、こ、れ、を、出、し、天、神、の、表、と、い、ふ、清、籠、を、神、輿、持、行、り、月、十、日、之、待、宵、これ、を、小、月、と、い、ふ、**名**、**月**、今、宵、の、月、十、五、夜、三、五、夜、是、月、月、見、仲、秋、十、五、夜、の、月、を、待、て、中、こ、ろ、ち、和、漢、と、同、民、同、今、餅、を、割、し、同、答、は、芋、と、枝、豆、と、を、

八月ツケ、**敦**、**賀**、**祭**、十日、氣、比、大、明、神、ハ、越、前、因、敦、賀、祭、郡、小、町、氣、神、仲、哀、天、皇、風、土、記、云、氣、比、の、神、宮、宇、依、日、伴、之、八、幡、哀、神、天、皇、の、無、祿、氣、比、仲、哀、天、皇、の、祭、例、系、八、月、十、日、今、月、二、日、至、近、因、上、里、四、方、の、法、高、人、教、下、師、也、師、ホ、来、り、集、り、二、日、神、輿、洗、り、敦、賀、紙、屋、町、と、い、ふ、り、例、年、紙、細、子、家、基、竹、籠、を、出、し、京、の、祇、園、囃、子、成、摸、と、二、日、神、妻、四、日、を、後、宴、と、称、し、町、の、氏、子、東、番、西、番、と、い、ふ、山、を、出、し、地、車、を、町、中、を、引、出、し、山、の、上、二、丈、斗、の、松、を、立、四、方、錦、繡、の、邊、幕、水、引、ホ、洛、の、祇、園、系、の、山、如、し、上、二、氏、者、人、形、を、飾、る、山、の、数、或、ハ、五、或、ハ、六、祭、礼、當、日、は、こ、れ、を、出、し、天、神、の、表、と、い、ふ、清、籠、を、神、輿、持、行、り、月、十、日、之、待、宵、これ、を、小、月、と、い、ふ、**名**、**月**、今、宵、の、月、十、五、夜、三、五、夜、是、月、月、見、仲、秋、十、五、夜、の、月、を、待、て、中、こ、ろ、ち、和、漢、と、同、民、同、今、餅、を、割、し、同、答、は、芋、と、枝、豆、と、を、

八月ツケ、**敦**、**賀**、**祭**、十日、氣、比、大、明、神、ハ、越、前、因、敦、賀、祭、郡、小、町、氣、神、仲、哀、天、皇、風、土、記、云、氣、比、の、神、宮、宇、依、日、伴、之、八、幡、哀、神、天、皇、の、無、祿、氣、比、仲、哀、天、皇、の、祭、例、系、八、月、十、日、今、月、二、日、至、近、因、上、里、四、方、の、法、高、人、教、下、師、也、師、ホ、来、り、集、り、二、日、神、輿、洗、り、敦、賀、紙、屋、町、と、い、ふ、り、例、年、紙、細、子、家、基、竹、籠、を、出、し、京、の、祇、園、囃、子、成、摸、と、二、日、神、妻、四、日、を、後、宴、と、称、し、町、の、氏、子、東、番、西、番、と、い、ふ、山、を、出、し、地、車、を、町、中、を、引、出、し、山、の、上、二、丈、斗、の、松、を、立、四、方、錦、繡、の、邊、幕、水、引、ホ、洛、の、祇、園、系、の、山、如、し、上、二、氏、者、人、形、を、飾、る、山、の、数、或、ハ、五、或、ハ、六、祭、礼、當、日、は、こ、れ、を、出、し、天、神、の、表、と、い、ふ、清、籠、を、神、輿、持、行、り、月、十、日、之、待、宵、これ、を、小、月、と、い、ふ、**名**、**月**、今、宵、の、月、十、五、夜、三、五、夜、是、月、月、見、仲、秋、十、五、夜、の、月、を、待、て、中、こ、ろ、ち、和、漢、と、同、民、同、今、餅、を、割、し、同、答、は、芋、と、枝、豆、と、を、

八月ツケ、**敦**、**賀**、**祭**、十日、氣、比、大、明、神、ハ、越、前、因、敦、賀、祭、郡、小、町、氣、神、仲、哀、天、皇、風、土、記、云、氣、比、の、神、宮、宇、依、日、伴、之、八、幡、哀、神、天、皇、の、無、祿、氣、比、仲、哀、天、皇、の、祭、例、系、八、月、十、日、今、月、二、日、至、近、因、上、里、四、方、の、法、高、人、教、下、師、也、師、ホ、来、り、集、り、二、日、神、輿、洗、り、敦、賀、紙、屋

盛り花に神酒尾花を月小供に或は五小相筋も今の
清人の説は八月十五夜雨多し八来年元日收晴之巻
十五夜晴々と云ふ元日雨ありといふ所或は物記
たりある年これこそ多し雨多しと云ふは
秋は只このひの夜にけり世に雲井月ハ多し雨
名月や一夜をゆくをたは袖了は也 雲徒

新月

三五夜中新月
也 百樂天詩

端正月

事文類聚○今
の八月十五夜を

以良夜と云ふは縁之書言古事は良夜ハ
深更なりとありあるは秋の夜も限らざる

芋名月

俗間今日必芋と云ふを
食子故は芋名月の名あり

月華

人字八月望
月華あり或は

夜半或は以微雨後或は必八月のとなりて秋後の月
俱はこれあり或は八月の五来鮮明旁照數十丈金線
の如きれば百餘道或は但紅雲と云ふを纏繞するは
川吳比部撫謙少り時一ひこれなるもの景象鮮
妍千態万媚直ま人間いふべき所の奇之云云
又言二月朔日正午日華あり日華ありある人愈々

得て李程が五絶の詩云徳勳天監祥月華
ふとのこれを謂耶 五雜俎 ○愚按は我俗七月十六

夜の月中三尊仏の彩向あり
といふれば八月華なるべし

十六夜の月

哉生魂
既望夜

○倡月さかづきといふ

初汐

海潮八月独大なるハ何
を初潮八月は初者

故は月屋多しはハ蘭盛なり八月の望尤盛之 五雜俎
秋は金丸なれば金生水こそ水ハ金を得て盛るなり

を名抄 備安志は位を言が
るを附會するものハ非なり

司召

昔六位以上が階を
るハ能能召を

元は皇爵を授けり之上御官の東の二廳に居るを仍
次は朝所は多て三獻の規式あり次は日女禮の座を是又

三献あり挿取の花を上御以下冠する大臣ハ白菊網
云ハ黄菊を簪ハ龍膽をの余ハ附の花をこも二月の

列見は同 式兵の両者より法司の輩の首を選成る
を列見といふは書をあつめを擬階の妻といふ

を列見といふは書をあつめを擬階の妻といふ
を列見といふは書をあつめを擬階の妻といふ

司召ハ秋の除月之京官の除月と云春の除月ハ縁召
公事根源

と号す各洋任の軍を召まき大政

八幡祭

官秋外記の二體に於て石津也教隆卿記

放生會

八月十五日諸國よりとありといへも男山の神

事を以京師の人八幡系或放生會といふ社

改養宣の南八九町あり京を去る四里余男山石清水

号一或雄徳山鳩の峯と称、欽明天皇三十二年冬肥後

國菱形の池の邊民家の見之方の時神降と云我は是

人皇十六代答由天皇と云ねよと豊前國法座一八

幡太神と稱、仲いひ貞觀元年秋七月八幡大神鳩の峯

に移る、あ秋行教南都大安寺に居るこの僧姓八武

内大臣の裔、曾て貞觀初宇佐の神祠に詣り其元日

及昏八大衆経を説夜に密咒を誦と夕夢中大神告

て云師玉城と云、我も又随ひ玉城に居ると當り皇

祚を護るべと行教と云、山城國山崎と云、その夜

大神又夢中と告て曰師我居る亦を云と覺るとこれを

又多々東南男山鳩の峰に光を現る、行教これを奉

て宮殿成る○正殿三座中八幡宮神東八氣長足

姫尊神西八比咩大神玉後嵯峨天皇源姓を靖皇

賜、時八幡宮を以氏神とこの社を以本朝才の宗廟

と云、毎年二月十日初卯の日神来あり所神来と准せし

八月十五日放生會あり養老四年九月征夷の時あり大隅

日向の國逆乱をよめて宇佐の官は初精せり、あつその

徐冠辛嶋勝婆豆米の神軍を率てつ、國を征し敵

を對て利あり大神降と云合戦の向多く教皇を致せ

宜く放生會を終まると法圓の放生會と云、始に○

今晚神を輦中に出し、神幸を促し、左右の馬寮

沖馬二疋を牽召使官堂外祀史、左右兵衛の府弁

太錢上卿、左右衛府上藤前駐、お指屋敷、さきり向ふ

神輿、楯の眞を下り、省院、頓宮、さきりて行列、初幸、

准、この式後三條院、久二年より始、

當社、お式甚、教皇、之、故、略、と、

鶴岡八幡祭

相州鎌倉あり一名八雲井ヶ峯上の宮三座中、應神

東八神功西八妃大神、神下、の宮四座中八仁徳天皇東

八久礼宇礼の三神西八妹比咩、後冷泉帝の所、伊豫

守深、義朝、良安、倍、貞任、を、伐、た、丹、折、の、首、あり、と、

康平六年八月石清水の神を相州鎌倉郡今の下若宮

の地は初請を永保元年二月成就義家朝長修後を
加ふ治承四年十月右大将朝朝の小林のまはつた
今の諸國へ毎年八月十五日放生を其の地を精流
竊馬角 つくし

筑紫宇佐宮祭

十音 欽明天皇三十一年豊
前國宇佐郡鹿の峰

カホアリ

葦秋の池の上の民家の見流して曰我ハ是才十六主誓
田天皇廣幡八幡之我を護國灵驗威身大自在王
菩薩と名づく迹を徳州は神明を岳今影よひ地
二在とすこれに參と勅て祠を建八方は八迄の
幡を立故は純道して八幡と号す社説に當社於登
奏して云大神の絶言我无量劫よりこの二有化生
て善行方便を修練の流生を濟度と我名を大
自在王并とせとて帝敎聞ありとを修し公夏
根光る云八幡ハ岳跡の早後ハ豊前國宇佐郡鹿の峰
ハ聖武天皇東大寺建立の後巡礼の志は純道
ありて彼寺に初請すれ身之を勅使に八幡宇佐
二あり○宇佐宮祭の事ハ
勅會へ放生をよめ地を故寺

志賀八幡祭

十音 四代
天武天

皇即位九年壬申近江國湯谷郡に岳跡八幡一の所
前八幡大井ハ今ハ聖王子是ハ唐尼僧の取聖志子ハ
阿弥陀八幡大井の分身ハ淡海志是山王七社の神
あり淡海國湯谷郡坂本村あり見瀬村の神社ハ
あり今ハ山王の
外神奉るあり

筑前箱崎祭

十音 祭神三座
中八座神天

皇東ハ神切皇后西ハ武内宿禰ハ仲良天皇三韓を討
と欲あり神切皇后も小筑紫糧目の官より軍
旅を停よの時天皇崩所この時皇后懷妊臨月か
らんとす男子の貌をなり弓弩斧鉞をとり
呪して曰請征伐の後降誕わんと三韓とて平定し
筑紫にありありて男子降誕する小慈神天皇是との
地を呼ぶ宇奈志邑といふ胞衣を宮ふきあり地を埋
を裁て標となしこの地を鳴る箱崎といふ醜酬天皇
心喜正年六月廿日純宜よりて宮を箱崎の松原
建例祭八月十音○古老傳てり昔この松原に飛定
慧三宮の篋を埋む故は箱崎と号す松を所は極
て標とすこの松原在とて縁起を云昔自幡四流赤

幡四流虚空より降る其所ま松を裁て標とせしむ故に
八幡の号ありと猶悦送と異に社八統前國那珂郡あり

河州答田祭

河内國長野山護國寺地藏院
の縁起云々當社八八皇十六代

應神天皇の御陵は母后神功皇后の御胎内よりして
之韓征伐の後筑前の國に於て降誕帝號は額の形あり
由多ま答田別の皇子と号しを以て是を弓矢の家を守り
之を以て對し顯れり治世四十二年仙齡百十歳の春大和
國豐浦の宮より出崩れ玉体を瑪瑙の椀に納め河内國
藤原の國に莖りなれ三十代欽明天皇の初よりて宝
殿を嘗て之所の神明を祀る所謂中殿ハ八幡大井丸ハ
仲長天皇右ハ神功皇后之世ハ神祠多しといふ當社ハ玉
體を納めしもの冥廟ありハ幡宮の根源威験法を
知し神祭ハ八月十五日之先ツ十四日の夜奥の院の御廟前
本堂ハ風聲を行幸なり翌十五日午の刻還幸御宇
了四月八日若宮宗孫樂見降臨年まこれより放生
云々當社ハこれなり
伊勢安濃津祭 十音 社説
云々但社説の趣を記

云々

勢國安濃郡洋城の南ハ八幡宮藤原性古より良の二神
相傳ふ建武中足利氏ハ二國を以て八幡一社を尊ん

欲し修治を以始とす宮殿を十歳山の上と造り石
清水の浦を初傳り源家の興隆を行る日記云永正
年中當國兵乱よりて神政荒廢僧願海募りて
國中を化して再興と時亨禄二年又數十年の後類
廢れ僅に存と寛永壬申年城主田獵してこまに至り
小祠を林樹の間に置る左右何の神あるを悉く村老
を召てこれを問ふ言足利將軍の建る所ハ即心形を
覆して土木を集め正殿許殿神庫華表を造る寛
永十二年初々々祭儀を行る同正年岳水斎厚の二
村三百石の地を附て昌泉院を以別當とす今寒松院
といふ古ハ山上より千歳山ハ幡宮と稱せり今の地ハ
迂り安濃津の城を經るを以安濃津ハ幡宮と号す
乃一志郡岳水村ハ屬と蓋津の城の
街坊ハ舊藝安濃二志の三郡ハ隣といふ
揚州西成郡 坂三津の寺町あり三津とハる津安津
雜波津是之傳り昔竹基寺院を建て三津寺と号

後神統より八幡を初傳と毎年八月十五日祭あり
社統も當社八幡和天皇の所宇筑紫宇佐の神男
山に遷座の所西海より初めて至り東洲中への旧跡も
祝ひ祭ると又一説は應神天皇行幸の地とも云り

○松州難波堀江の人月を以所賞と各所文も及
ておまゆるこれ月元と稱し又難波の所枝と稱し是
八幡

富賀岡八幡祭

十音 江戸城南深川あり
祭款 在所所務公團に記せ

と云別當大栄山永代寺 宗 深川第一の神社と云い
神侍八管公作之源三位親政深川を崇め其後
千葉家に移り足利氏より傳へ基氏持氏に至り後
上杉家に傳へく太田道灌浄くこれを依傳と名所記
寛永元年長感法印冥夢の事ありて永代嶋宮
居を建章一同八年成就と 磯石集 深川の土人本居
神と云祭礼八月十五日放生會あり三十年に一交正
祭礼を終ふ練物引山ホを志と深川の摠領守なり

豊浦祭

長門國豊浦郡龜山あり多神中
應神天皇元八神功皇后右八仲哀天皇

元二社注式云人皇五十六代清和天皇貞觀元年男山
小辻座の時行教和尚行宮を造りこれを初傳と後上
所門院文明年中建立○今八月祭は三月十四十五
の吉日龜山ありて先帝祭と云安徳天皇の所
祭礼は阿弥陀寺に隣あり海辺に宮ありこの祭前後
四の間に鳥花などを得む又平家能赤向の國の海
辺より常のこのとかり是先帝の所祭月ありと里
民の又九月十四十五日八幡春日の所社をまつ
國主より馬二を牽と競
馬ありと云是八幡祭也
野口念佛 十音 播州 加古
郡教信寺ありこれを野口念仏と云清和天皇の所
寺教信といふ者あり姓氏詳ならず或は南都興福
寺の住僧永西房の弟子と云加古の驛舎の北に草
店を築び常々西方に向ひて称名念仏を性仁と云
寺に藤人の着を授け勞を救ふ貞觀八年八月十五日
完栗の夕に於て盜賊の爲に教信の首を教信とい
ほり不勝り最へこの地を葬り毎年八月十五日僧徒多く
教信寺に集きて仏事念仏を○叙書の略も云

八

抄州勝尾寺に僧あり勝如と名づく貞觀八年八月
 甲子の夜一僧あり門を敲く即ち迎へる客僧云五只
 播州加吉の教信之念仏の功方ふより今夜極楽に生
 生する高僧ハ必明年の今夜生す死くとひひ
 て去る時中音承宣元年八月十五日の夜勝如
 果て 駒牽 駒迎 江次方より云元元八月十五日
 死す 朱雀院の所四忌より

十六日に改用ふ頭書云云依濃勅使の牧十五ヶ所所
 式二載る所の一々天皇南殿より所ありて所馬を
 取し出所免時ハ建礼門の前の大庭より放てられ
 を牽介し裏書云云上野九牧必喜式廿八日云云
 七日甲斐の勅使の牧十七日甲斐穂坂の牧廿三日依濃
 屋月の牧廿五日依濃勅使の牧五野の牧又十五日信
 濃勅使の牧廿八日上野九牧以上六ヶ日必喜式云云
 下りこれ外兼平官府十三日依濃杖父の牧廿八日
 同小野の牧所馬これを貢ぐ公事根源云云公卿以
 下次方より馬を賜ふ馬の足綱をとりて所前不
 下り一歩を取扱へたる馬を引念使とて次將

菅大臣祭

廿六日 京四條の南

綾の小路西

菅院の東より南北道を隔て是善公の宅地との
 内北に菅神の社あり是菅神降禊の地之故に社を
 建てこれを名ふる雍州府志或人云け所昔菅家の館
 一夜花梅の天神といふは是之今も花梅の跡この地
 存も又一説は文字の宅地にて菅神を祀りて遷すの地
 之浴の人阿米神と禊又例年八月十六日社内の氏子こ
 沙を名ふる神輿一基童子
 素袍供奉社儀は後ふ

御霊祭

廿八日 八所の

所祭

八所の其午後九時神輿二基中の所其の離宮を
 出で幸の辨八本九辨を座上に建て棒二本四人を
 以これを奉行を幸の辨といふ神室のより特これ以
 とも故も又勢力の人辨を帯の同子立を以て
 杖を挿すこれを系辨といふ又一人竿の先は道祖神
 の仮面をのけて神輿を先らひ仮面の鼻長大なり
 俗これを玉の鼻とい別當及氏子供を所族所を
 西の方今出川下鳥丸を歴て長者町より室町を

過り本社へ入る上所其の社六京極通筋遠橋の乾二町余あり下所其の社與も同所は津敷を生ッ餅五斗別尚氏子供存上所其の社列の如し神幸此洛次京極を生榎木町の西より東洞院の西を歴て出水より室町を下り二条をより油小路下立賣をより東へ京極より本社へ下所其の社六京極通大炊所門東北の方小

来名祭

春日大明神の社勢

あり例祭八月十八日なり
 州来名の城下あり祭る神四座別尚氏眼院の祝
 り云経津主命八神護景雲元年下野香取の宮
 より勅請と又武甕槌命八正夜二年八月十八日常陸國麻嶋の宮より勅請と天兒根命姫大神八永仁二年八月十八日伊賀の名張より勅請と毎年八月十八日を以祭辰となすと正夜永仁の月日を以これを終るといつり先十七日社前の南北に車一輛を佈夜まで絃楽あり翌十八日祭礼の時件の車を南北に流し音楽を奏と明和十年の春回祿以前ハある社六座より北三崎の神社三座南春日見の神社三座

共ニ往昔春日法度の日を以祭る回祿祭祀延
 三崎大明神土地の神之法度の年月詳なり
 凝洲崎鳥洲崎池の洲崎合せて三崎といふ七月七日の
 神幸あり氏子貞糸川に於て石をとりまうとあり社
 小献とて石を石取の神幸といひ日囉遠物を以て

○この八月祭を天武天皇の祭礼と記せる書あり

日本紀云天武天皇元年九月朔車駕還伊勢四
 乘各宿る今駅中ニ神社ありより深紀欽

菩薩祭

肥前國長崎に於て未船人船神

和之云舟の神を媽祖娘々といふ俗に舟を船井と
 以唐船長崎にあり強くなる所の神也
 水揚るを馬琴拵る五雜祖云海上天妃神
 あり甚矣なり航海の者多く危險を著る風
 濤の中の如き忽ち蝴蝶ありて雙死を夜半忽紅
 燈あり甚危なりとも濟すと獲天妃ハその功
 徳を言て以天子配とてを以の女神ありとせし
 和之記云の媽祖娘ハ天妃神也○長崎に唐人

をたんとふたひの記 花 露草 月草 花

あまのつばき 花 秋の記 花 宇治の花園 花

山城風土記 花 八幡道と八幡嶋明宮の市宇天皇の御

子鬼道の雅郎子桐原の日折の宮を造りて宮室

とてなほなほて所名を鬼道とす ○鬼道雅郎子

崩所のころを新勅撰集慈徳昔人一人のあま

あまの世を宇治の秋の花をさしむるをさす

宇治の花を八幡系の日折の宮の花をさす故に慈徳

雅郎子崩所のころをさすをさす千梅春耕のころに

花通のころをさすをさす雅郎子の崩所のころを

花のころにさすの花をさすをさす花のころに

文慈徳八幡の園白花通公より五代後法性寺兼

実の子のころをさすの先祖の花をさすをさす

或説は秋の花と八幡宜を以て一とて宇治の花を

元芳宜の 花 芒の穂 尾花 龍膽 花 龍胆 花

久佐又途加まるとに龍膽の俗はとをさすをさす

能りよ ○正白花のころをさすをさす ○和定家

白の説は尾花がりのあまの 花 黄蜀葵 花 蜀葵

是就撿するより のころ 花 漆の花 花

と八列種之宗重記時珍の説は 花 煙草の花 花 茜堇 花

露草 月草

宇治の花園

花通

崩所

宇治の花

雅郎子

花通

花のころ

文慈徳

実の子

或説

元芳宜

芒の穂

尾花

龍膽

久佐

能りよ

白の説

是就撿

と八列種

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

花

○石菴 ○初茸 ○湿地茸 ○草茸 ○蜂茸
 ○麥茸 ○搜茸 ○猪茸 ○鼠足菌 ○馬勃
 本草 平茸 和俗 所用 ○鹿厨本草
 菴菌を以平茸と云 木曾の山中

多くこれあり昔木曾養仲西京へて跋扈しこれ
 を携へて官客を享せしむる本邦の珍味と云 本朝
 食 滑煤茸 根より考へば 蛇茸 天狗茸

月夜草 この三枝大毒あり 又笑菌
 人殺てらつて 笑金子 俗このもの

楓樹の下に生じて大毒ありこれを含め六笑と云 昔
 は死よむり速に人糞糞土を穿てその毒を消し
 たり八個活すとありといふ ○嘉定乙亥僧徳明遊山
 して忽ち奇菌を得てゆりて死に供して毒花
 僧死する者十餘人徳明坐す糞土を穿て免る
 正を撰り日本の僧定心といふ者あり寧死とも
 汚さず唐譯折裂する死に今に至る 巷中
 花ゆく日本の度牒あり其僧姓平氏日本国京東

相州行香縣上守の郷元勝寺の僧あり寧非
 命と死しその口を汚さず陣仲子の風は無毒

五雜俎 馬琴云此俗何人なるもの乎 夫國はわが
 本朝の茂氣をうきとて永く史籍に記してその
 災を嘆む 毛見 農民秋まわりて年具を収
 入るりの秋 納るるや免縣吏田地の忌悪
 を巡見せしむる毛見といふ毛ハ猶草といふがごと

稲のいふ苧ぎものを立毛といふ凡百石の田地に
 去て百石あるを縮取といふ悉く縮く得るの美之
 その次百石のうち或ハ八分七分の收納を成し成しと
 するの收納を定め免を免といふ謂くは免多し免
 く取るの美之百石を収といひ五十石を半納といふ是

中の上とこれ年の豊凶による農民の免のちを
 又とて或ハ一分或ハ二分を成し免を請ふといふ
 收納を言を免 中稻 落穂 稻束 穂掛

八束穂 長く大なる稲穂は八束といふは穂口も
 穂の東ハ一握りめでは死に遊新古今

①

集兼光神代よりある鳥八束
秋まき田の縮の志をひきとるん
粟拒引

粟拒引
秋まき田の縮の志をひきとるん
粟拒引

向引菜
中拔大根
鴈
月令より八月鴈
来り九月に至りて

又鴈屠未賓とていつか何と仲秋先ッ
鳥の志を主とす季秋後至者を賓とす五難
鴈

○鵝 ○腹白 ○丁陣 ○田面 ○落
雁書

○白丁 ○海丁 ○丁字 ○赤丁 ○丁番
雁書

漢の撰式
厨金
厨がまを今の人丁の声しけり
とる湯りへ金八只を借りてるの
か古事

二季守
厨の具名
厨の系名
稻負鳥

渡鳥
鶺鴒
色鳥
啄木鳥

鶺鴒
啄木鳥

鶺鴒
啄木鳥

鶺鴒
啄木鳥

鶺鴒
啄木鳥

鶺鴒
啄木鳥

鶺鴒
啄木鳥

鶺鴒
啄木鳥

鶺鴒
啄木鳥

鶺鴒
啄木鳥

鶺鴒
啄木鳥

鶺鴒
啄木鳥

江 蛙 九月大津四の宮系 河鹿 蛙の好く山

より秋まぬりて鳴かまかづとのみ海でかろと六旅
む俗傳は西行はあわりといふ所の八旅説なり考る

所るゝの声麻子似れハ俗傳ハ河鹿 臣 正字六續類
といふ委くハ春之宛蛙の條下に注せり 漢 魚杜父魚の

屬動水底まありて鳴魚之極まの魚を得りて河鹿と稱
茲圖あり伊豫。越前。越後。加賀。近江。山城。赤松。美濃の

土地より多し各もろり形も声も大同小異之石伏より石
らひ石のち又川おせ見らるるふんこ伊予。我むこ近

あし魚越の外も狩あり近江。山海名産 下築
圖會てふま子奉くことば傳へたことば畧記

蛇入穴 鮫 一説はままとま未詳 新酒 中級
故に今も季よ出ス 池田伊丹の新酒
濁酒 醪 醪 池田伊丹の新酒
新酒糟 大抵季秋初冬の向

は江戸の若きものやちり入洋
まはりのをわらへるといふ

九月

この月夜やうや長 西も不夜長月
といふ略しく長月といふちり

無射 律 寒露 節 秋分の後十五日
斗身すまると

霜相降 中 空雲の後十五日戌
庭まを霜相降しと云

季秋 月 月令廣文 梢の秋 和俗
令 杪秋 旬會 所用

玄月 素秋 九月、浪大 紅樹 通俗
秋の異名也 志

樹驚眠処とわれハ紅樹と云くハ九月の月名まハ
出無くハ紅樹月の謡ちん韓退之詩ハ春風紅

晩秋 紅葉月 蔵 寝覚月 秋
くま

小田菊月 上 本深月 菊月 菊秋

和俗 色る月 本この葉おりてちりまふり色づく
本は色の秋といふく知なト

御燈

春二月廿九日 不埜田の由文

不埜田の由文

不埜田の由文 九月七日 江家 此れは徳園の田代 換毛をもち不埜田 月詠をしてきたるをこれにつきて 租税を三分二と免じりあり細くは流石より坪 付帳をまねた大長藤よりき定めりて結わくは 終りしに他はにほむる田よりあり かく不埜田よりあり 公事根源 桂の宮相撲

六條の北西洞院の西九月八日 桂宮相撲 拾遺抄

天曆の時 震旦より渡りし僧を長き髪となん

いひりし元醫師よなんまゝ桂の宮にあり大まゝ

桂の本河のけむる桂の宮とぞいひまゝ長き髪を 桂心よまゝのとり 今昔物語 桂宮可 泉涌寺舍利舎

云云 羅刹寺神社 泉涌寺舍利舎 公洛の泉涌寺舍利舎 毎々九月八日 舍利舎を修し音響あり 律師法海等の自蓮寺より

多岐の 重陽の宴 九月九日 俗言

月九月八日と日と九陽の影ありふかふ重陽といは づ之昔天子南登ふ出所たりて帝令修す上至 御子まゝよりそらそとの名はもの皆探取を法り文 化り大なるはそと法ぎり十月の旬のまありそと 氷魚のふ例有り又群居ふ菊ををまゝ大くそと 九月のまありそと 御帳のたふさ草葉の伐をそと 御そと菊瓶をゆ又草葉の房をちと改し挿むが 菊の氣を遷すとつふかふ有り 公事根源 今梅ざりに 類聚國史七十五卷 桓武天皇の御製を載り

云云 延暦十六年十月 曲宴酒酣 皇帝歌曰 己乃志具 礼乃阿米 尔菊乃波奈 知利曾之 奴倍岐 阿多良 蕪乃香乎 未ねをりて御り 此時既く十月 御菊の賞ありと云々ありと云 菊のまありまゝのふんそとつはそとつはそとつは 菊のまありまゝ 林佐光仁の御代より唐より菊 けりそとつはそとつはそとつはそとつはそとつは くるふありしにのふかふの和訓ありと云 和名

加波良本中可波
良於波故とゆきり

菊花の宴

俗名上用の
魏王三女就也

山々々法花の秘文を窺うより多く意重に傳へ
意重八百余歳をたもち貌か美ら如 魏の文帝
の時多と彭祖と更と文帝に此例を授けし文
帝まの例を受く壽七十歳今人上陽の宴是
と云の記法傳の甚きと云ふ也 列仙傳に彭祖六帝
顛頊の玄孫也八鏡長銀周を享う八百歳なり度老
王也穆王曰と大まるとんとを帝と稱しと云は後
遂に後河の西に佳彭祖の傳がゆき意重よりを以て
附合せしめ元野史小字の傳記より公菊花宴の秦漢
以來既にあり西京雜記卷の三を戚夫人の侍兒賈佩
蘭後き杖風の人佳傷を毒くす宮内より一厨のと
を祝ふ云九月九日茱萸を佩き遠飢を食し菊花
酒を飲ひ人をくく世壽なりと菊花舒く時甚
此菊を採採り 采菊子雜(これを賦) 采菊九月九日
あまり始く菊を就くこれを飲ひまきか
菊花酒と云(魏)より以前既に如し 菊花酒

汝南の桓景費長房と號す杖をもち長房謂く
云九月九日汝が家小災厄あり汝一人を
を此菊葉を以て杖に懸けしむれば災をくく
菊花酒を飲はるとの細傳也と桓景の言に如
くく此菊と云ふ菊も夕暮りと遷れ難
皆暴死を長房が言まると代り今の人九月九日
と菊花酒を飲むことこれより

茱萸袋

續齊諧記 西京雜記の記あり
示よ
風土記續齊諧記 九月
九日望壽星云 唐詩 九月小袖

九月九日より八月よりと香を
是も九月より良候と云綿入小袖
煖身肉と云(酒)の時酒を飲め病を増さ今日
く酒のくめ用と云世漢同言ふも哉と云

温酒

了後光明寺
殿下の抄も見たり

菊籠衣

九月衣款菊籠衣
長白裏は朱 清嚴正

徵記 九月菊句より三三襟 所湯敷地 地下に良候
今日纏纏名の少袖を用ひく九日七袖と云

菊の綿

九日夜中入る所敷の南階
上多し菊花を植その菊よ

春自葵の綿を丸め菊花の地りて枝にけり
今日葵を菊花の地りて枝にけり
九月九日菊の綿を丸めて何の地りて
とも更傳へば菊花を丸めたるに
ぐんとあそび
竹の世語問答
菊の綿供 栗の綿

本邦の倍九月九日親戚朋友送ふお花を
ゆき菊花の綿を丸めたるに

後の雛

雛祭三月三日九月九日
いひあらざる
さくらさくらやま陽も雛を丸めたるに
物治るるも雛を丸めたるに
花の源を丸めたるに
業とらん日本記崇神天皇七年の春二月大物
皇の神は昔より胡越の長を丸めたるに
はりの火彦の命勅命を奉り和理媛とらる

の吾田媛と後
吾比賣那素夜望とらるるに
夜雛花の地りてとらるるに

帝は廿八年天照太神伊勢國百祀度令の平鈴河
上りふ所法府の附て若子命菊を丸めたるに
倭姫の命ふ所後解を丸めたるに
其の小さき人形へん
罪咎山守りる悪き神の布を丸めたるに
負せくゆるる流るるに

この天児を接ねとらるるに
とらるるも流るるに
今ハ秋の雛祭に
風あつらふ秋の雛祭をせ

海胤廻

夫野人の改め海胤廻の官を

九日 諸神記 鼓の
神馬寺由岐社天慶年中幼後中
神社山城国志賀郡鞍馬山あり多る所の神一尊大

己貴余 神社家業この社天不慮の時或世に事あり
の所穀とこの神あり故小由と号す蓋大百員
小彦名たふ疾疫を瘳し五りを治す神へとも
五條天神及當社小穀とくろ好送活より或改お祭
る神進雄ととも例祭九月九日八日の夜

氏小田男彦物を施す小秋也當日神興奉祭
九日 山城国志賀郡鞍馬の北二里許より祭所の神高

雲の神也水徳の神より別當神宮中云の持社より
神代の巻云伊弉諾の尊詞過冥智を斬く二層に下
るの一層を云 雨龍といふ○貴布祿の社八船玉命と高

龍龍二社法武九月九日小兒咳逆疫く死亡する事あり
仍く相者をくくとせむ云貴船の神の出する日也
とく小社弘仁二年百六代後 秋九月九日疫を退しむ
今貴船の神興と稱し各中を振るも此是の遺言歟
改曆雜事記今より以来毎年九月九日小兒お集りて
小神興を造り貴船と稱し市中を振るこれと

生玉祭 九日 抄外東生郡天寺山に云はり
あある神一尊天生玉命明夜

多中本教寺の傍にふまると寺院をふの神地と云院
内へ接し神との石標を要し彼信を罪も信悲れく
神威を今に法彦の側へ遷しつる遺言也其後信
長の兵火に傳り教社灰燼となり後工神坐を別不遷
と云く中秀吉城郭を築る日今の地を遷し 社家法進記例
今九月九日神樂一基地は流鏑馬あり社内十坊ありとの
内南坊を

後日氣 九月十日或十日松本表所菊の
宴あり○系師の壬女十日再今

四宮祭 十日 近江因濃郡大津
の詠ありを云る神

四座大比叡 大比叡 小比叡 國常 氣比 仲長 小禰師 大比叡
見了
へ按らる小當社八日吉の神威へ故小比叡を以このに遷
す里民云この神法彦の目官幣使四位某々故小
四座を以四位の官と号すと云はるに神法彦の由也
小四位と号するに社法云云や神を大比叡小比叡
氣比小禰師佐土の老翁に小禰師を以本社と云

故小田宮より例祭九月十日大津浦中比大宮より神樂
二基引山十二透物造り花水をか見夜二今相撲と

下鳥羽祭

山崎國守治部下鳥羽ありなる
神樂天皇田中丞と号し例祭小

九月十日下鳥羽及横大橋の土人本居神とを神樂二基
あり名勝志し云々神社八法付寺の聖二町むくり

例幣

本林の中 九月九日見り土目より伊勢
みらり 例幣の幣を吹門布と注連を引き
門外小標本を建く傍危及軽き腹の軍門内へ入る
ふるはを記しこれを前庭とす土日の胡幣使度足

○例幣とハ伊勢大神宮例幣をもちたる一毎年の
事これハ例幣とす 公事根源續日本紀孝德天皇元年中始
め伊勢大神宮幣帛使を割せり云々云々云々

中臣胡臣をきりて他姓の命を用ゆるを指されと依り
大中臣後浪を名もとくこれをいふ

堂よりむ吉田最上并を神祇友成を
土日日蓮上人相列苑の口はたか危難あり自忍の下僅小
一令成合ふも今日案門の儀を修め修め修め修め修め

御難の餅 文永八
年九月

住吉相撲會

九月十三日住吉の相撲
會 拾遺抄神興玉

池邊屋後清信供ありはち神を勅使代りて宣
命を讀みりて五横十三番童相撲三番あり續
自異禪の上は注連を注しけり合はり是今日ハ
神事也 社家記一は云々云々ハ注連を注しけり

新穀の稻をもちけりてよりて農家用ふの外を
あつちもちりて賣りてをもちての市人群集を
る故室の市と云ふやハ當社の新嘗會と云ふらび

今ハ神樂を別處よりもちて之を新嘗會ハ神樂
なるなる五横をいふ

室の市

九月十三日室の市ハ神樂
中ハより例法云々

社記云々社の社より律の遠祖田槌の着袿支物を
みりて云々の神市をもちりてをもちの社と云ふ諸
國の市は病と云ふ外を言ふ故小田の市と云ふハ又浪
を今ハ注連を取附と云ふ注連を今ハ注連と云ふ

と云ふ別と云ふ

白川祭

天法天神の祭
月ころも成

月ころも成

2 放くこれを彼更此堂傳教大師草創し且本寺
 藥師日光月光の三尊大師の造り九月十五日
 未刻流僧三綱堂司樂人沙汰人當仕人出仕先
 時刻を三綱及一和尚告く出仕の鐘一書を撞
 該役人太子堂仕任太子の像を鳳輦よりつきの
 式二月十五日の如廻廊の下より六時堂(波御あり法
 了此の先振洋阿弥陀經傳世万歳樂
 延喜景陵王統利悉く終く西刺還御謹
 十五 八所神の社洛北長谷村の西山石倉あり玉城

岩倉系

の四隅に岩倉を置是より一捨茶抄に大
 雲寺岩倉觀音三親長卿記云文明三年三月
 廿九日岩倉長谷の觀音より十二回山融院の御教其野
 中納言文範卿草創し鎮守岩倉大明神所謂八所
 と八幡加茂松尾山王住吉春日新羅又太
 神宮貴船權荷平尾を越以上十二社これを
 十二所明神と称是也大雲寺の徳より五人本居
 神と是例を九月十五日神輿持行は神主八村中の
 氏子交りくこれを勤む大雲寺元徒兩人を代りて

公人法師三人借ま夜宵大炬火二に立流るふ乃と用
 カ之書何うな礼九月十八日○倍ふ堂金の尾くまらふ
 とふ夜ふりく神供を奉一村の内彩婦をえろ
 るく響れの腹をさす一神供の意を以ふ載神
 弟より三ゆくむ一村の老若らひさき枝本と持彩
 婦は尾をとり新ぬへくわと走るをまきまきく
 亦なり故ふ尾

小倉系

小倉のち方神中八尊神天皇左八神功皇后右八玉依
 姫草創年月詳なきも後多解院文治四年に依傳
 をこの地ふ動傳し一の神後を方と四時の祭相傳ふ
 今より作太祝の子孫世々祝史となり其後流末
 後河をといふに到津の成衣屋よりまに流末
 の製九国乱きと神社灰燼となり祝史のそが流も
 四方に流散しと到る所を考へてこふ所く里民
 一々に叢祠をたて僅古法を存せり其年中細川
 慶定作の社を造営し又到津の社をより室曆庚辰
 年小倉系更上祠壇設教を建てる事ありと云

巳午の日記を以てこれを山台と云ふ山口の古名仁登の庄故に仁登の神社と号す多神住吉三神を以本社と合せある神二神味耜高彥命下照媛命各一社以上玉殿三社と云仁登の神社と号す又織媛大御神と号す指宮とも秘名衣食の事を主たり神多たよりくは号あり祭礼の事乃織媛の神事あり次の日神幸神樂三坐本社の西神幸の地よりなる流瀆馬あり皆国主よりこれを統行せらる有司代てく国主の律礼あり又六月御田の祭あり鎮守の年月詳を仁王十二代垂仁天皇の御事勅幣を奉らるるを度會新嘗會の祭の傳記矣散也

内裏より初稻を伊勢右宮に奉らせ外宮十六日 内宮十七日 ありたり大嘗會といふ御即位の後日本國中の神々御饌をたてまつるをいふを度會といふ西宮度會郡乃德座師をもよほの名なり又伊勢を行の都ともいふ新米を奉る夜は早稻米の御事あり神々を初稻といふ

これより中より今の入初屋と云ふ穴織祭 十七日 十八日

抄別豊清那池田村民家の山よりあり綾羽大明神と号す是揚陽群小云穴織祭服の支社との間より二十町斗云〇意神天皇古古年春二月百濟王縫女之を貢真毛伴といふ是今來自の衣縫の始祖日本紀同三十七年春三月戊午朔阿知の使主勢加の使主を具ふつうと縫女を求めむ阿知の使主高兼國に至りて更は乃路を去りて道をたるとれを兼を去りて兼王乃久礼波久礼志二人を副と導者と云これより七号は通より七を去りて吳の王女兄嫁弟嫁吳織媛織媛を去りて同四十年春二月甲午朔阿知の使主高兼乃流麻葉とあるの阿知大神工女を去りて是を以て白取大神と号す是今流麻葉の国にあり使君の祖と云ふその二女を去りて揚屋國とある武庫小云て天皇崩せりて乃乃とこれを去りて大鷦鷯の尊と云ふ其の女人志の後今号の衣縫

九

屋の衣縫是之同書仁徳天皇七十六年戊子九月廿
日一織姫二人とも去のひて終るをいひひり織姫
寮の神となり毎年九月十七日十八日を元織姫
両社の祭礼と和衣荒布の神供を任てこれを神

衣を不
と称す **呉服祭** 十八日 按列豊崎那田村の園の中
多九月十八日日本紀の詠草季社祭の詠六
夜神天皇春三月織姫を長と求といひ **城南寺祭**

廿日 山城國を羽のたよりあり神一庄を羽天皇神住
業社説よまむあり所二十社の日七社之伊勢石原松尾
稻荷賀茂上下 平野 春日以上城南神と号し例

祭九月廿日神樂二臺ありこの地人皇七十四代も羽
上皇の離宮あり王城の南 **八幡花の取** 廿日

よりゆ名と城南の歌宮とあり **八幡花の取** 廿日
山城國八幡宮社傳九月廿日花の取を傳先六月

より撰て始り花臺を造りこれを地盤割といひ我侶
板を割を片といひ又割といひ是板を割り臺を造る
の板は花の取といひ社傳の承子臺を割り元傳の割は

のく社傳をた食むと粉を必く草花を制し臺を
神亦の廻廊小飾り酒宴の具を傳史改工花の取終

波女利女祭 廿日 洛陽を建の北宮町の西よりなる
亦日と見雁列府志と見昌社社傳昌は波女
を多る不ありと實は祭天の〇むり出雲の春日こみ人

のひすありの布をくくをくけに葉あふんとて多波女
取より方ねの波女利女の布よりと後波女利女

入るもつとまんささくといふ上平あゆりふき源のやより
古七回もといふ伝つとて蓋地とてを後波女利女社

をくそ伝よりゆりそ社故まきく無故天といひなあり
皇代格遺事既天王沙流湯准持主の三妻と取すうその名と

婆利女といひ **重葦内傳** 安藝安藝の安女天女波流湯持
王の才三女とありといひ傳よとね波利女を祭夫といひ

も又故まきふらふと大同夷吉三の社を東山依女半の八
幡宮の傍よりつとまんとて是祭をとりふりてとてふひ

えの所ふ女 **旅夷祭** 廿日 洛東邊仁妻村門前より
とてまきと

山陵なりてその美を祀りて本懐の社と号す **雍列有志**

例多九月廿四日神樂三基内一基甲級神田中の社人

同不地至の神を多神様と号す **康谷祭** 廿四日 津島

或は云ふ即大明神是本陽の神也

守村十禪師の夢之浪園寺の山に方二十禪師の社

有り同前八所明神の社と神号詳多し此土に本居神

と名をぬれ九月廿四日今雍列有志一康谷天皇祭

とあり有り今祭祀微 **逆後祭** 廿四日 社設ま云

今と記し及むと云 **江列園**

多那能羅湖の南相坂園の清水大明神八延喜廿四

の自王子輝丸の社と輝丸双眼古有る故に勅して延喜

廿二年壬午春三月公々大吏輝丸を供せり相坂山

小倉邊に各涙雨を流して多事此所り留る自州

の紀別長基経古屋の良女師補多り云云爰に其

姉の官途輝丸を去りて密林深淵を出入り相坂山

に來り輝丸とも花月を清賞し猶ほ山岩川

陸を偏歴し雲鬢髮類例也國人海名を

逆後と号す天永九年丙午九月廿四日輝丸遊をいゆ

故に毎年九月廿四日の祭に今小節りて在り云と

ふ一婦宮薨去の後輝丸とも一社を合せ祭る云

馬次云け統女経云とつて輝丸を延喜帝の

自王子と号す又輝丸を自目といふ詳も未だ臣

ともも羅なく昔々輝丸を相坂山に捨りてあり

自目と自王子とをいふ事とつてあり一きりなりを謂

る **退** 一ひんや世俗の誘も延喜の代てめてま

たぬいふもいふをくく不仁の終ひ八田支野人といふ

もなまふ事と云ふ又輝丸を自目といふ詳も未だ臣

いふたがねが相坂山の分れ初まふゆきの合とてよ

ると何をもいふ一盲人の習書とていふといふ

うへ輝丸八延喜の自王子ともいふ相坂山の邊りて

唐を引張ひて凌雅のまきて今も何と云ふ延喜

の宣まのまもく流るると愚痴まふ逆六坂の

経るると一寺門の註云江列志坂山園の明神二

一而八坂と云ふり二坂と云ふりといふ坂の社をい

を傳りて程の程を設るる人又云二所共道祖

神を祀り以園所の流ると云來藤院の御宇輝丸

の吳を當社と合名あり傳く土佐藩の社稱下の社
の市小井あり園の清水と名く清水明神と号は多丸九

月廿四日上下社同日神樂

天満流鏑馬 廿五日

廿五日西成郡天満寺と名する所の神小野上同日九月廿

二日流鏑馬あり社家これを勤むる所遠より天

後橋に至りて馬

北山系 廿六日

六の社洛小麻
を遊目的を辨と
苑寺の西南衣衣

の岳の良平林の中あり祭神祥るるを例を九月

廿七日名勝寺の北山天神東九月廿六日お見拜殿より

と三音あり二月廿七日六所明神後より菅見記

或は九月廿七日等持院村系社多持院麻衣寺相

藤と名する北山系と稱す○北山神社は北山村より

天長六年八月天地変災ありんとて丁丑北山の神と

稱す類聚曼名後志と云北山ハ三橋の西に六町ハ

あり三橋ハ北平野の
向紙を川の橋と洛陽より成妻の方北方にあり

らとていふも古より小山と稱せ給ふ村名の標と

不々吹るる小山系と云日と記を誌統述と云ん

津村祭 廿七日

津村御美の社ハ折引西成郡大坂津
村より多あり神後金持六系政

が吳に昔津村の某より武勇を勵と法固を巡り

軍御奥首を極むを極むと云りて夕京

政の社に詣りて神殿と通夜を時と神楽武勇

を感下流と云持津國新波の勝地と稱ひをれ

我孫ふ女を擁護せん若くは何を以て神とせん曰

枕上神幣ありんぬ且んぬと云れはとて神幣と

某と云りてこれを創ひ津村と云りて義祠と造

て神幣を納めりてこれをなす御美の宮と云え祿

の以御美大時社と稱号あり毎年九月廿九日神系

神湯の式あり津村の土人本居神と云

〔栴陽郡談〕

鳴滝系 廿八日

法名の社西仁和寺北西小鳴滝
あり諸神祀也云 王城の守護三丁番
神右白虎の八神

三雄の標鳴滝川の邊にこれを對面西來崔より

西内院より九町の擁護神と稱列有志と三壘

子の宮ハ西山鳴滝村と云是方の邊に地をのれりて

仁和寺法堂と云友社と云ハ本居神と云同日

小合せたる次又云鳴滝福王寺九月二十五日神輿
一基鉾五本所室の所所れ在り入る云云

福王子祭

其旨 是鳴滝多福王子の宮西山
鳴滝より班子自手辰をたかき皇

右ハ桓武帝の孫也云々吏部尚書仲野親王の女
之光孝帝立く皇后を宇多帝此母なり云云
の地を神々仁和寺の地也云々毎年九月廿八日
これを多き難読也云云信云云是は云云これ一年中
の信はのおおれの終り云々われんも鳴滝多福
祭廿八日と記云云近來の法抄云云福王子祭と云
載り是も同じの事と
經云々再び云云
任喜の神送り 晦日 九月
標別住吉の神雲玉出雲の飯殿一飯御即ち後を
修せぬを住吉の御權の秘と云云後御り又云
祭と秘を云云石の上所云々祓宣出雲を
送録云云これを祓送云々今日に天王寺石の上
居の地も又神送りあり大坂也
の神社も云々神送りの神あり 野の宮の別

山城国葛野郡小倉山の下椿木あり云々伊勢の
齋宮云々の先け云々柵の云々伊勢右神宮を
と記後云々の不潔儀也故云時の宮と稱云云凡
云云齋宮の親王定早云々官城の内候云々をト云
云々初齋院云々後續云々則今明年七月云々
出の院云々齋を云々城外の津野をト云野宮を
送云々八月吉日をト定云々河上臨云々後禊云々昂り
野宮云々神祇云々野の宮の別れ云々齋宮云々は昔ら
せの云々云々三月の九月伊勢云々斎の天正御云々
云々云々云々云々云々の天正御云々由豆の儀云々
齋宮の御院云々云々これを云々の稱云々云々
云々云々伊勢齋宮云々後云々故云々の宮の別
と云云云々の因縁を以齋宮云々云々 日本紀云々
云々神天皇云々天照御神を豊豆入娘の命云々
云々大和の山雲縫の邑云々云々同書云々云々仁天皇
廿五年三月天照太神を豊豆入娘の命云々
姫の命云々云々同書云々景行天皇廿五年二月五
百野皇女を云々云々天照太神を云々云々

三代此の如く、ゆき代々皇母を侍給ふ太神へ、
まつりてをりて天皇即位のら内親王の内處
女をえりて太神宮の御給はと定のまねと下定
り内親王をきりて詔王の姫宮をト定むる例
あり、これをも定むる二年の八月より聖年の九
月より野の宮より、向てこの間三度の神より三度の
禊

桂河の御枝

桂川ハ山陰國葛野郡ニあり
大堰川の事ハ河の西ニ桂河の里

あり故に渡橋以南より今桂川と稱せざる
野川とす、上を野小枝川の南より、桂川と
合して凡舟宮の群、九月十七日、本日桂川より
旅り、後禊を修り、ゆきこれを桂川の御枝とす

伊勢御遷宮

凡大社造り、皆毎一陣の儀
あり、く暗目を定むる勅使

あり、伊勢が太神宮春日の社、二年を終ると、ま
必遺留あり、遷宮の所、納す所の神室、行事、官、調進
まは、この月、伊勢が太神宮の人より、京師をむく、十六日
の御事、今、藤上御遷宮あり、と、凡、系宮の人

先、靈山の國門の儀、禊と、その秋、履を、裁、済、
ま、行、國門、深、く、太神宮を、信、ト、同、く、木履を、穿、
後、枝を、推、
よ、の、福、
遷、宮、
と、あり、
下、
○、
ハ、
と、
○、
ハ、
と、
○、
ハ、

ハ内宮、
と、
○、
ハ、
と、
○、
ハ、

爵入大水為蛤

九月の風、
水江陵道、
九月の風、
内、

鯉魚風

九月の風、
水江陵道、
九月の風、
内、

いりなき風

九月の風、
水江陵道、
九月の風、
内、

風もあつたり暑もあつたり 菊 月令に曰く菊は秋の

花の色を以て名づけりて 独菊 黄花を以て

名づけりて 独造の正色に 菊の白きもの

者を以て貴しとす 五雜俎 菊本 鞠の地

ハ正朝に 陸佃 雅 四声字花に云く 菊 華竹反本草注

に云く 和名加波良子毛木一云可波良子

波岐俗より本音之重日精草と 和名鉄

百夜草 蔵玉 日生見系 古今集 蔵玉抄

金系 蔵玉 金系 蔵玉 蔵玉抄

霜見系 蔵玉 菊の淵 全 忌綿

千代見系 蔵玉 蔵玉 蔵玉抄

乙女系 花の如 花の如

百菊 握々系 令系 碎揚系 公氣草

女花 鞠花 秋無系 蔵玉

秋の花 菊を以てし 蔵玉

秋の花 蔵玉 蔵玉抄

蔵玉 蔵玉抄

蔵玉 蔵玉抄

蔵玉 蔵玉抄

蔵玉 蔵玉抄

蔵玉 蔵玉抄

地榆 又音赤紅 土作せし類也 其の音を紅と云う 地榆のこころ

仙蓼 毛へ後 樞抄 上 吾赤紅 仙蓼 白英 雲下 飯 八友と云ふと云う

南天の実 嬰子桐実 皂提子 苦提子

木患子 木欒子 棋植子 榎実 老母

桐油の実 桐油の実 この油は松脂と 必く赤んと云

椿の実 椋の実 栗 落栗 徳栗 焼栗 榎栗

出落栗 付栗 必 徳栗 脱と云地

三度栗 紙後 及上

山栗 山栗 さくらい 山栗 一年と云ふ 収むと云

榎栗 水栗

檨栗 栗の種は 檨栗 花栗

唐柿 唐柿 花栗 新榎

新胡桃 新松子 楨藤 著通 著通 著通

茶葉 茶葉 食茶葉 本邦より 京師より 苗代茶葉と称する 此胡桃子より

佛母 佛母 近世より 天和本草

佛香碧 佛香碧 佛香碧 佛香碧

抄を合をくつゝ大皇少皇大皇皇明麻栗柿糖
正親町公通々の抄并に所傳殿紙本よの云々
るるるる○一後、按列能勢部木代村の云々
佳り子家代、まは子の候を真、先神功自后、起
まらひけり及、切佃大丸の近里八八城八幡の
神領より、今、台法寺よりこれを捧と、り

達麻呂忌

南天竺香至太子齋齋氏と号す
普通元年深、入、武帝契と

まはを浴て、魏、入、嵩、入、九白、純、経、西
域、飯、飯、の、大道、二年、十月、各

射場始

天子、射、場、始、

入寂代宗、識、く、圓、昔、天、師、と、号、す、射、場、始、

あ、く、公、卿、以、下、の、射、場、を、御、使、の、先、代、皇、文、本、記、
二、三、百、と、云、公、事、根、源、に、依、り、ま、は、は、次、身、十、月、百、射、
場、始、注、し、嵐、人、云、七、日、一、日、各、一、日、射、
八、張、菊、の、宴、ま、り、て、**張菊の宴** 吾、群、臣、詩、
を、作、り、

酒、を、の、り、と、ま、陽、ま、ひ、ま、り、○、延、暦、十、六、年、十、月、曲、
宴、ら、り、酒、酣、み、く、皇、帝、**十夜** 五、日、夕、○、浴、東、
歌、く、白、に、**頼、聚、園、** 是、始、く、**十夜** 藤、原、忠、成、

山、真、正、極、乐、寺、真、如、堂、詠、を、以、始、と、云、な、る、も、
大、師、の、作、こ、の、像、は、天、験、ま、り、て、別、時、念、佛、を、始、む、
こ、れ、を、十、夜、と、り、蓋、伊、勢、
真、國、と、り、め、こ、れ、を、修、**興福寺法苑令** 九、月、
十、日、
より、七、日、の、間、南、圓、堂、ま、り、妙、法、の、大、令、を、ひ、り、し、む、
あ、れ、十、月、六、日、長、國、の、大、臣、内、膳、の、御、忌、日、ま、り、て、**南、院、
始、大、政、大、臣、冬、詞、**、は、ら、れ、大、臣、の、許、子、ま、り、て、父、の、御、
忌、日、始、く、し、せ、り、と、り、や、六、日、此、令、を、行、く、**公、事、根、源、**

維摩會 十、日、
南、散、與、福、寺、に、行、く、こ、れ、を、
他、の、大、職、冠、の、忌、日、ま、り、と、り、
之、故、事、要、略、に、云、慶、西、二、年、正、位、大、政、大、臣、聖、上、廟、
安、禰、社、櫻、傾、覆、ま、り、ま、り、こ、れ、令、を、行、く、○、齋、明、
天、皇、三、年、十、月、内、臣、藤、子、山、階、寺、を、建、**維、摩、會、**、を、修、
日、山、列、陶、原、の、家、に、行、く、山、階、精、舍、を、創、**維、摩、會、**、を、
を、設、く、**維、摩、會、**、
始、く、**元、亨、教、書、**

金毘羅祭 十、日、
綴、列、格、是、祭、
上、り、り、な、る、
神、一、坐、或、ハ、三、蒲、大、明、神、或、ハ、素、戔、尊、鳥、毛、當、山、の、
形、象、の、改、ま、り、故、に、象、頭、と、号、す、**同、基、詳、る、に、**

十

一説に信教大師入唐帰朝の日金毘羅神を勧請せし
と柿小より磴十八町末より石階嶮嶮又山宗徳院の
廟を以て廿二金毘羅大権現と稱せし合をせりゆ意歟
○京安井親性寺に山宗徳院の社あり金毘羅の
社と稱す八月

廿六日祭礼に芭蕉忌 十二日 芭蕉庵桃青を
伊賀の人松尾氏

後に不考く俳諧ふ多かり元禄七年十月十二日
痢疾を患ひて終彼の藤亭に没せし其用去未
丈艸木空骸を送りて大津の長仲寺に葬る晋子
終焉の地を偲りて枯尾花集といひ傳記許六僧
菴傳及に凡俗文選作者列傳系上詳に近世俳諧
流の目録を記しきく連文與り出故又今も愛ふ
因記 御祭供 十一日 又御命講式八念奉と稱
す日蓮上人の思ひよまの

弘法忌を御祭供とらふ終る故おわいごと
えとめと通に教養をわいごとく日蓮上人の房
列の三國氏弘安五年十月十二日寂す年六十一後醍
醐天皇勅して大菩薩の号を授る蓋洛小妙頭寺

の妙実雨を祈る此嘗より因に註圖賢人今も此の
徒佛壇を掃除紙制多の造り花を挿むるを徒
を供せしめり筒とて風烈これを用命講義
とす 一菊終夜をかりて夜を講 元を以

下元の日 十音 正月上元七月中元十月下元これ
を天を又月とて 淨難類書 道三

正月祭を以上元と七月祭を以て元と十月
祭を以て下元とす遊ふ元三官大帝の祓りこれ
俗名の一きき 三光の日水官人
の罪福を天ふ
五難廻

告事林 聖一忌 十七日 洛東福寺の用山忌之今日
方丈に什物をささる年後

聖一の像を腰懸し奉りて寺僧をばふ
遊後一淫堂の須弥壇より女置り
あゝみちし京師の人昨今も其今日
を奉中社山の後とす此に奉りて
御取紙

一向宗門の後此月教考上人忌を偲る是日十月十日
より取紙とす此に水漬しきとてせり此取紙を奉

十

夷講

廿二の月七日或ハ永代より七日迄

高買の徳西宮大神宮をみよ此神

神酒未供に赤くも朝を信じてん又別酒宴

を授けく年中生念も而の花主或は意念の人

を授けく念應にこれを物と又物との

像六のし方かく實主五混一玉盤玉物と

かく位し工價を定む或は中或は方友賣る者

繼と必相寄るこれを夷講の講堂と

一兩酒與の或ハ一や香の居あられ夷講

此言文拂

高買者廟と号は夷極に高買より

法勝寺大衆會

皇居の後天台宗

の住持取道衣の後醍醐帝の勅より律衣

と名づく寺は岡崎村の敷中諸堂の縁

る九重の塔の依村の南より塔檀と号する様

なる風雅集神妙寺園自之よりと名づく

と系橋より春の本の一役と當寺ハ南橋寺

の西北新黒谷の南之の他ハ白川大臣忠仁の別業

として寺ハ白川院の御形と當寺の

九重の塔浪速の浦よりつりたる

土目大社神宮ハ出帝の國神門那將榮

十二年岳跡昔ハ宝殿三十三文今滅して八丈

後深草院室治元年八月廿五日建三三條院應保

元年始く三月會成り

七十二度終中十月八日深秘の事より二十日

十日より十七日までを藤岡と稱すこの間風刻

波のくま日一蛇化度一藤一系と海濱に治む

人これをえねむく園造の神人上人宿願

ありこれ蛇を曲物と名づく神宮に納む

その蛇の形蛇に似く流形の双文連り

彩色画が如く尾先ハ魚尾に似く

くうが神の如く神

に切

切れ風味をま

十

ゆきよこの辰切之同切や沙をよる合のる其角
 古村の系八者といひ惠といひ茶といひ類く湯ハ
 蟹眼をぶ一茶味方の中五雜俎茶の上品な
 るも此類國産茶の名あり宋の初國茶を創定
 名香を彫く蒸して以餅となす凡茶を賞を
 うる唐より始する陸時樹もめて茶法を定
 む○陸羽云茶よの名五あり一茶二檀三設
 四茗五芽因話録本朝茶を治ぶと足利將軍
 義満義政相續と其を雪を雪む或のよ義満
 々大日義弘の命とて茶を治る桂の後
 中治を以上品とて近世紙師利休茶法よ名
 あり或ハこの事をを教ふるをといひ又園と称を
 和名鈔一茶茗余推集注茶ハ它加の反字余
 様二作云々今略とて桂を茶と略く
 を茗と音略云々くれハ茶よたて和名ハ
 きん又吳志云孫皓の時茶を縁ふく以酒
 小當とあねハ和漢とも
 初霜 又早霜
 霜の初 霜の終

初霜消る 霜の花 霜の終
 霜の初 霜の終

初霜消る 霜の花 霜の終
 霜の初 霜の終

初霜消る 霜の花 霜の終
 霜の初 霜の終

初霜消る 霜の花 霜の終
 霜の初 霜の終

初霜消る 霜の花 霜の終
 霜の初 霜の終

初霜消る 霜の花 霜の終
 霜の初 霜の終

初霜消る 霜の花 霜の終
 霜の初 霜の終

十

たり香なり九月の花はくち梅のつとやきとのふ
清香のれい流くちくち梅のつとやきとのふ

より赤いゆりくち
正花をふ
水仙花
葉

蓋銀星とつとふち者花を玉玲瓏とふ
湯夷華陰の人水仙花八を服く

水仙とちとふちゆりくちとふち
枇杷の花
槐花
黄く

散紅糸名は系結と
散紅糸名は系結と

花の字色の字法ひ
風本とととるを題と
と秋あり
御筆

他も冬内の疾風あり又信風は他も本朝の俗字ん
音詳ありと「わく」の果ありたり海の名 言水

雪は子時
冬日雪を雪中に鳴くものありとこれ
とも正音ありとこれをきつとらふ

或は今もまきまきとの雪和暖と感とく声をききと
たり寒くまきまきとやきつとや日まきまきの雪は 四雅文

枯尾花 落葉 松の花 冬様 枯柳

兼二物 雪六花
韓氏外傳 九草木の花
多くは五出雪花独六

出朱子云地六ハ水の成數雪六
雪吹 雪は風
の六文の

水結ひくち花をまきと放つ六出
雪消 食をまきと
寒風を防くを

玉塵 玉屑又同
雪消 食をまきと
寒風を防くを

雪は
はくち雪
のまきまきとらふ説あり
たび雪夜衣

薄太乱と出
雪は
たび雪夜衣

てくちまきをふたはハ惟子の略より雪は
てくちまきをふたはハ惟子の略より雪は

云雪のつとふち花を成るものを今の俗米粒
雪といふ雨水初く凍く強ひる者ことと本知

の俗は風花之惟の和訓もなるとも元片
平のまきまきハ片葩雪ハ初冬の雪をふた

①

たつちちハハ平雪まき雪
花ハ平のこまきまき雪

北ハ何と雪と風の交りこと北地の人
のいさや雪子懸の交り北地の人

にハハ雪
中ハ凍死
雪吹倒也

雪作
雪の作んとする時雷これ
夜を夜之多く北地あり

小越の人冬月竹竿を落徑
まきまき雪まき雪まき雪

雪団
雪轉
布袋○雪連ナ

雪燈籠○雪獅子○雪中小兒の戯
雪まきまき雪まき雪まき雪

雪礫
雪舟○雪雪中
の戯あり

雪車
樵ハ馬の流行せ具之史記
信安滄景之間冬月

作小床氷上曳之溜之凌床
沈存中筆談○秧馬

雪中ノ薪を推の具之本を以て雪車ハ北越の人
多北地車の如く故雪車の名あり山中推す所の薪

を雪車積と山下に積を轉ト平地まきまき
雪まきまき雪まきまき雪

雪車を行ふ時ハ必鄙方をこまきまき雪まきまき雪
雪車を引く則右足をこまきまき雪まきまき雪

鄙曲といふ甚感哀を北地の人辛苦ハ雪車
近來雪車の勺作あるまきまき雪まきまき雪

雪車ハ薪を積の人の雪あり物あり雪車
太痴の積
細負
雪地の人雪中用

雪中積雪凝て
雪蛆
積雪中雪蛆あり

雪女
山中積雪凝て
雪蛆
積雪中雪蛆あり

今歳を以てこまきまき雪
雪蛆ハ夏之
雪蛆
美人ハ雪所

十

富士の雪

冲牟六万系の不二の峯より雪
言ハ三月の尾まけねはハ乃の夜より
けりといふをうて雑を云抄ハ赤人の田子の浦
の分新古今冬の秋入りといふ冬とて吳竟一旬は
よりく季を

定むる一

霜

記催ハ霜の白さ者ハ説文又
鷹管山の霜紫を深下

玄霜

氷

氷の轄

八雲御抄藻以草
凍風をいふ

薄氷

氷柱 氷

氷柱氷をいふ
氷柱をいふ
氷柱をいふ

銀竹

李白詩白雨映寒山森々似銀竹

厚氷

氷の衣

氷の花

大寒のとき氷は
音わたりをいふ

氷面鏡

氷の鏡をいふ
氷の鏡をいふ
氷の鏡をいふ

煮凍

氷英

孫面云氷英ハ雨壺相雜るり
師説曰三曾礼
和名録又氷散

雅も氷散ハ氷雪の雜リ下る和名義曾礼
氷散ハ和名義曾礼
氷散ハ和名義曾礼

和名録
和名録
和名録

和名録
和名録
和名録

和名録
和名録
和名録

和名録
和名録
和名録

和名録
和名録
和名録

和名録
和名録
和名録

和名録
和名録
和名録

和名録
和名録
和名録

和名録
和名録
和名録

天祐の初鼓城あり暑を佛寺に避く忽大聲
地を震ふをやくまうて門外を視ると一電をえ
るその大サ寺橋といふ寺一地みよと大餘をう月を
経く乃チ消也その言証然し似れも宇宙の間を
くハ亦何ぞわき所わん五雜俎これの説
を抄ハ電ハ夏も一今類を以て生す

霰酒

南都の産あり又霰酒とも
以ハ酒中霰散に似る糟あり
をいふとを礎り表袴の文寶
わきあり石多し成ありをいふ
け敷正て難し季そのをいふ
冬より一抄き異物ハ百もいふ

霰地の錦
霰釜 霰燗

凝 凍 不龜其菜

寒 疥 戰 炭 炭竈

炭 炭 炭 炭 炭 炭 炭 炭 炭 炭

切炭 廻炭 炭斗 輪炭 炭俵 河州の産 白炭 細炭 炭頭 山炭 炭竈

助炭 大鉢 衾 横頭巾 足袋 袋踏皮 温石 鹽温石

獸炭 火達 埋火 蒲團

多鼻 獨刺 刺足袋

太平記 野

...

...

...

...

...

狩杖

犬を牽ぎの杖は杖は是田犬を捕らむの杖の本を用て作る長弁八寸五分の端のふけ

切る大何八目の通

狩場

三柴翳 狩合

よみ柴をさきまんと又本をたけけりるのやふてを獸を捕らむもいづれ又人の目をさぐるものなるべし

鴛鴦

夜の本長は答答

鳥

よみ油をそ含み皆消化せし

を画る人八重垣

白鳥

海蛤を食きて消化せし

出づ

黒鳥

阿伊依

鈴鳥

鴨

共はあぢらふと刻す

夫木集西好らむるを氷を以て

うまいつらんあぢらむるは浪防の海あぢらむる

水鳥

浮夜鳥

鴈

万葉不乳鳥又

千鳥 ○川ちどり ○浦千鳥 ○群千鳥 ○小ねちどり

○淡千鳥 ○破ちどり ○夕波ちどり ○友樹 ○千鳥

氷魚 氷魚使

山城近江氷魚細代一所其氷魚九月より十二月まで五貫

延喜式 氷魚の使の事

柴漬

冬月伏見の里人柴漬を以雑魚

大和物詰小てころり

をとる柴漬の法は柴を枝葉つてねて伐とて三四尺

余河水の浅き所をこれを積むる水面を柴の徑

四五尺寒き氣嚴る時ハ水中凝りては難く雜魚

柴の下を集る則細を柴の四方に張るの柴をこれハ

魚地をさきまると細を入る幸きの後

水瀬暖ん故に諸魚聚るを能く止む

浚取 嚴寒中池水を

浚乾して 魚を取り柵を浚田上りて

諸魚を取 細代 氷魚をとるまのりぬ

冬々の夜山中に獸を捕らむ大を引おちる獵者の細よこ

引とらふまを痛く狸狩をいとわつ又今式は六火を

山へりて春を

生海胤 燠海胤 鹽鱈 金海胤 鮫 河豚羹 ○今令の俗鱈

鯨ハ鮫 西施乳 山陰 吳人河豚の腹を 京

鯢 勇魚取 伊沙那 万葉今久夫殊

鯨 鯨以鯨を突く元鯨ハ冬月替り南

鯨 鯨志ヲ詳なり余豆相杜歴の日

浦賀より下田まで海上三十余里船中鯨を

を放りて七八回水面をわたり者僅に二三天

あり鯨の卵をわたりる色赤海人年々

を水上を花舟も同船の者云この名の花

果は鯨又水面をわたり一海四五十町あり

潮はなまぬ揚揚も如き 鍋焼 貝焼

風爐吹大根 蕎麥湯 蕎麥種

炭団 鶏卵酒 生薑酒 綿 唐綿

冬櫻 小梅の花をふともは彼岸

冬之麻 拾遺集 宋を月志

風 風ハ初冬

揚州の藪隠夜竹て数人阿房

宮の賦を念むるをば声急かしく小

風なりをの大サ豆の如く廻るを教

十月

仲冬ハ日月紀子會して
斗子ノ建の辰なり

黄鐘 律

大雪

節小雪のち十五日斗
壬子建を大雪とす

冬至

中

大雪の後十五日斗子建を冬至とす
○この月朔日たあぐ冬を至とあるは

ハこれを朔且冬至とす内裏宣陽殿子平也の
節余あり諸卿文章を献ぐこれを変せし
民間も又餅を製し一陽來復を賀す但
朔且冬至のときあぐ毎年十月朔日この日
アもくわら奴僕を
勞まぬの日なり
除夜
今の人冬至の夜
を以小歳とすあ

をいも盧照鄰元日の詩云人歌小歳酒花
舞大唐春則元日又これを小歳といふ
亦猶冬至これを除夜といふ太平廣記盧
頊傳云是日冬至の除夜五雜俎

一陽の嘉節

曹植冬至表 ○本朝桓武天皇
曆三年十月戊戌朔慶賀を以

田租を免る類聚国史
是冬至をかるる始なり

雲を書

今此人多
く冬を以

雲を書るを用ふ左傳春王正月日南至
公既之朔を復るに觀其堂上もりて以是
と書て礼之周礼保章氏五雲の物を以吉凶
水旱豊凶の候を辨せ注し二至二分雲氣を
視る青を虫と白を喪と赤を兵と荒
と黒を水と黄を豊と則ち独り冬至
は云ふは但雲氣條變一歳四占
尚吉凶互に異なり云云五雜俎

周正

周ハ子を以
正月とす

復月

一陽來復を
月とす

辜月

淮南

天正月

晉家
の所

暢月

淮南

霜月

霜降月とす又略して霜とす
この月より雪を以て降る貴族於候に
類ひを以て互に相知りこれを雪消といふ

雪見月

士

神樂目

露木の節、陽多あつたを神
乃若戸よりあつたはく神樂
を奏する月とすし、此月六節の舞を
もあり又東三條の御神樂を
行はく故に

曆具奏

朔中務省より毎年の曆を奉
るは主上南殿に御さ
るこれを御後あり出御さるる内侍
は曆を奏せりて欽明天皇十四年百濟の博士
が奉る[公事根源]曆毎年南都幸徳井よ加茂氏
の新曆を受く梓よ鏤せしり今も
大経師曆と稱せ[雍州府志]今免許を考りて
曆を敷く所山田勢三崎豆江戸蔵南部與世
に南院のめらる曆より
く画く日月の謝しを
宮線を添晋魏
の向
宮中紅線を以日影を量る冬至の後長き
あつた線を添荆楚歲時記唐の宮中女功を以
日の長短を添る冬至の後常日
比を尺一線の功を添る[明皇雜錄]履襪を南

婦人冬至の目を以履と襪を四男婦
たぐはく是長至を儀のまへ魏晉書赤豆粥

冬至 共工氏の子冬至に死す其疫鬼とす
まのり赤豆を煮る故に冬至の日小豆粥を

食はく疫を
何のめらる
本邦冬至

相嘗糸
大和佳吉大神元師恩智立富葛木鴨

紀伊國日高郡の神主各官幣を受く
小迎ひの終る法を延喜式に相嘗糸の

神七十一座とすなり[公事根源]その園の初米を以是
を供するの社司神巫亦官幣を

宗像糸
先代官事記

胸肩神神社教義筑前國宗像郡にあり
上卯 神三衣一説にや依那田鳥村に益益流

系大和山嶽以上三所は宗像の社あり三神も
に奉り益鳥もれ女心唯端織津姫市杵姫

①

二年四月より **豊明の忌** 中辰 今年の稲
を神とす

とあり今日君もきあしを長下
にも **日陰の系** 中甲

建曆三年十月十八日よりその殿上の儀を立

らるる八月延暦寺の元徳長樂寺と

官兵のあふ多く **日陰の系** 中甲

あり御願ありりり **日陰の系** 中甲

ありりり **日陰の系** 中甲

ありりり **日陰の系** 中甲

ありりり **日陰の系** 中甲

ありりり **日陰の系** 中甲

ありりり **日陰の系** 中甲

ありりり **日陰の系** 中甲

ありりり **日陰の系** 中甲

ありりり **日陰の系** 中甲

東三條の御神樂

仁平二年十一月十七日
丁未東三條の御神

樂をひける **東三條の御神樂**
誕生の所或ハ重明親王の家

樂をひける **東三條の御神樂**
誕生の所或ハ重明親王の家

内裏の外ハ皆 **山神樂** これ内侍所の

里神生と云 **山神樂** 神楽とぞ

齋服 **小忌** 青搦の衣 **小忌** の文竹桐

小忌の袖 **山笠の袖** 夏ハ玉

ハ堂ハ人 を **山笠の袖** 夏ハ玉

少の人ハ私 を **山笠の袖** 夏ハ玉

の明の席 を **山笠の袖** 夏ハ玉

若用 を **山笠の袖** 夏ハ玉

寸法 を **山笠の袖** 夏ハ玉

ア後 を **山笠の袖** 夏ハ玉

殿 を **山笠の袖** 夏ハ玉

と を **山笠の袖** 夏ハ玉

日陰の系 **日陰の系** 中甲

日陰の系 **日陰の系** 中甲

日陰の系 **日陰の系** 中甲

日陰の系 **日陰の系** 中甲

士

ふも生ひあももくまらるる昔の長くあつたりたるなり

古今采種抄 或は細く九組の或は多組ありき系

又白き糸を用ふ長二尺許一尺許糸を向けしき

うて左右八筋或は十二筋冠の左右一筋一纏ひ

結しては薩とよまを神代に豊満たるを日守地

まらんえり又あのみは日産の豊満冠の中より小

珠の白ひめ櫻の上よりあり老壯の色のあやとり

心葉 梅花三寸より又今の枝の枝の花見入

を佐よりハハ模方具ハ結花紅梅白

梅豊まつけ巾より結くを左右各一枝

式ハは枝 或抄ハ大嘗令の時近に

ともつ 神托びの衣 留那より老の衣あり

て稻を着くその阿あつとき年此姑かつて子を

をりてそのおをつけるといふををたふ此古令

集まらんえりあつては御即位の始なり

こそハ如此こそいふをとりてハ樂弘後まゐる

○舞の衣 志のいふるるるるるるるるるるるる

附るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

阿知女 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法 阿知女法

○これらを
大前張 ○宮人 ○本綿志天 ○後波浮 ○
前張 ○階查最 ○井基野 ○腰野

小前張 ○薦杭 ○閑野 ○後多 ○篠波
○殖槻 ○總角 ○春 ○湊 ○釜 ○神歌

○千歳 ○早分 ○吉利星 ○侍鏡子 ○本綿志
○昼目 ○弓立 ○朝倉 ○其約 ○富藏 ○酒蔵

吹草祭 八日
吹草祭 八日
吹草祭 八日

吹草祭 八日
吹草祭 八日
吹草祭 八日

吹草祭 八日
吹草祭 八日
吹草祭 八日

吹草祭 八日
吹草祭 八日
吹草祭 八日

吹草祭 八日
吹草祭 八日
吹草祭 八日

吹草祭 八日
吹草祭 八日
吹草祭 八日

その後毎年
御火焼 庭燎の送風欝凡
を以て例とす
この月法社に於て

あれを修む ○朔日智恩寺法多
上出雲彦彦の神 八日
荷の氏子の児童小神輿を造り
人家お介て若菜をいひこれを以て八日の大焼料と宛

八日の新御供に社家松本氏調進
院有極川の官基大坂守侍の宮玉造
申九日貴船結神十日右田の社立
は神明十二日生玉十三日三休八幡
并今宮処に神明吉田園崎天王并坐

上下の御天正三日
この丹舎日
て後火を扱
の御火焼と

新玉津島の火焼
拍まをり
の勢精

五条南鳥丸の西あり
或ハ法来の和歌あり

五條南鳥丸の西あり
或ハ法来の和歌あり

五條南鳥丸の西あり
或ハ法来の和歌あり

五條南鳥丸の西あり
或ハ法来の和歌あり

五條南鳥丸の西あり
或ハ法来の和歌あり

氏子之今日市人神酒を冷泉
子祭 子燈心

大黒天の火焼之十月の子の目ふ来年十月まで
用す所の燈心を焚くこれを子燈心といふ俗傳

空也忌 十三日 曉の陣扣
空也上人八天極三
年九月十日寂

年七十〇空也堂ハ極樂寺と号す也東坊門の
南渡川の東あり陣扣ホ侍主をさる侍云極樂寺
ハ元三条橋邊より根角及堀と稱す也
上人傳光夜々執儀念仏唱(洛中を巡る水山)
侍一毎夜麻布の上人その声を聴くと閑居
かとき一夜来りてさるればあれを怪む昨日獵
来りて云昨夜の雨に放り麻を製せと上人た
疑ひ此れその皮と角とをひく皮を製し角
を杖段に挿し遺棄のおとを獵ちも又これを悔ひ
愧く念ち別髪して僧となる今の陣扣ハこの齋
堂也晩年修行のさめ京を出て東山に往き
潤く云今日寺をわたり目を以て常日と定め

故その目を用く法を修まの院中十八
のその中身をの者判髪と傳となり代堂の
中を法名に加之の余有髮妻等あり若し
髪を剃り市中に賣る九十月十二日より十八夜
間夜々市中美法外の三昧を巡り各証を尋り
を唱念一或ハ竹杖を以て推り市の飄を鳴り
常此河を唱ふ物ありと此の飄と云く此竹
杖ハ貴弘檀上の竹を用く六指く北山貴弘檀の原
富君の送と第一と云わねどもん 陣扣 去来
長嘯の墓ものり清く死

髮也 十音 袴忌 常解 今の信男
女三歳

髪と死のそめと頂髪を在十一月十日を以奉
居神に侍む或新制の衣裳も表花を在り或ハ
大酒宴を設け親戚朋友を招く此の髪と
るくともありこれを髮也の袴といふ又男子
も袴を袴と袴女子も袴と袴と袴と袴と
とこら髮也の袴といふを袴ハこの日より衣服

年十月廿四日寂佛檀通載比叡東叡日光の三山廿一日より廿三日は朔ありて昼夜法回ありこれを論義といふ一山二院づく年々命場を勤むこれを天台今といふ信同も又大師講を修し赤小豆粥を食ふ粘柴を折く筈

御祭 廿七日 春日若宮のとしてこれを智恵満と云 本社を去ると一町ぐり平林の中より法要集まると若宮御殿天押雲命去れども若宮は社家秘説と云

○南於若宮のあふ夜宮廿六日 奥福寺の信願を田樂有り九段の信一人両願といふこれ其の義を言ふ長谷川堂春日の社に系詣野太刀を推し馬をひくこれと遍照院の儀といふ御旗下の前より流滴馬あり夜亥刻ぐりに若宮の神教は神幸あり神乐説く後燈燭を消し社家各神体を擁護せりてあはれ中終りて遷し奉るるに於て能く長り音楽相撲ホ次勇これに修せし尚日廿七日 といふ式日なり寛正年中これを定む巫女及伶人田楽申樂有り儀事の儀を以て職人松の下なる庭の南の方より

於てこれをまゝ樂人上級後者騎馬を借事は尾を圓白代といふ又陪侍あり田楽藝術を能くたけ儀楽園園をうらふこれを松平園園といふ儀楽の始小服を更制し吉の此類を仰りて万歳を祝はしこれをたけ園園の初といふの後奏曲始し金春金剛両方若事奉の時紀の立合を言ふ親世保生右左の太夫侍等の時弓矢の立合これを言ふ大小の鼓を以てこれを拍と名付し大和園を領するは武家各鞍並馬長柄の法を以て供事の儀あり夜々々

回使 春日の法より還奉り粗神幸の義に申 本社の時園白殿下よりまゝ騎馬の伶人は黒袍羽の巾子と夏の造り花をうけしこの儀は人白玉七十九代宗徳院の御宇天下太い飢饉三年又又上疫病あり園白法性寺忠通公これに於て大願を成しとて天下静ありより毎年行はるとを保延二年丙辰九月二十七日これの祭れりといふなり

掛鳥 春日の祭の時多額を以て懸置しこれをたけ掛鳥といふ雄千二百五十六羽免百二十四耳

(五)

者○小且（女）若女形○老且（姥）老母形○唱

歌○白（足）以上（元曲選）○（戲場）戲

房○半房○（香棚）○（觀場）○（句欄）○（醒世恒言）○（護城）

○（鬼門口）○（山棚）○（引戲）○（戲丈）○（又）○（又）○（又）○（又）

○（浪子）○（抄）○（西脚）○（扮）○（二扮）○（梨園）○（子牙）

今（う）○（鬼）○（記）○（も）○（は）

文章（端書）○（便）○（ん）○（を）○（え）

後（母）○（夜）○（証）○（を）○（鳴）○（ん）○（を）○（唱）○（ん）○（を）○（三）○（師）○（或）○（ハ）

御草（規）○（音）○（又）○（品）○（川）○（千）○（住）○（の）○（法）○（場）○（を）○（巡）○（り）○（を）○（を）○（を）

念佛（と）○（寒）○（垢）○（離）

後（驗）○（の）○（徒）○（中）○（道）○（終）○（ま）○（上）

これ（を）○（寒）○（垢）○（離）○（と）

毛（中）○（市）○（の）○（水）○（行）○（り）

と（称）○（寒）○（声）

歌（曲）○（上）○（指）○（ぶ）○（り）○（の）○（中）○（期）○（を）○（入）

声（を）○（寒）○（を）○（つ）○（ふ）

と（の）○（ハ）○（或）○（ハ）○（寒）

澤（庵）○（漬）○（製）○（ス）

九（土）○（月）○（中）○（旬）○（大）

根（の）○（以）○（存）○（漬）○（を）○（製）

是（早）○（春）○（の）○（所）○（物）○（と）○（見）○（る）○（元）○（品）○（川）○（東）○（海）○（寺）○（の）○（以）○（存）

和（尚）○（と）○（や）○（め）○（を）○（製）○（ス）○（根）○（の）○（以）○（存）○（漬）○（の）○（名）○（あり）○（と）○（イ）

茶（食）

寒（中）○（虚）○（在）○（の）○（人）○（雞）○（肉）

麻（肉）○（亦）○（を）○（佐）○（材）○（と）○（食）○（也）

新（干）○（大）○（根）

太（山）○（檜）

寒（苦）○（鳥）

又（小）○（言）

士

○五（室）○（山）○（有）○（虫）○（蟻）○（狀）○（如）○（小）○（雞）○（四）○（足）○（有）○（肉）○（翅）○（夏）○（月）○（毛）
羽（五）○（色）○（其）○（鳴）○（若）○（曰）○（鳳）○（凰）○（不）○（如）○（我）○（至）○（冬）○（毛）○（落）○（而）○（銜）
忍（寒）○（而）○（號）○（着）○（曰）○（得）○（過）○（且）○（過）○（其）○（糞）○（如）○（鐵）○（狀）○（如）○（凝）○（脂）
恒（集）○（一）○（處）○（醫）○（家）○（謂）○（之）○（五）○（靈）○（脂）○（是）○（也）○（五）○（雜）○（俎）○（又）○（佛）○（音）
子（寒）○（苦）○（多）○（と）○（い）○（る）○（雪）○（山）○（は）○（位）○（を）○（ま）○（た）○（り）○（ま）○（た）○（り）○（ま）○（た）○（り）
寒（苦）○（責）○（我）○（夜）○（明）○（造）○（栖）○（又）○（ま）○（る）○（ハ）○（今）○（日）○（不）○（知）○（死）○（明）○（日）
不（知）○（死）○（何）○（故）○（造）○（作）○（栖）○（女）○（穩）○（思）○（常）○（身）○（と）○（号）○（二）○（說）○（頗）○（相）
似（り）○（後）○（京）○（極）○（の）○（ハ）○（仏）○（院）
の（こ）○（ろ）○（を）○（ま）○（た）○（り）

臘月

十二月八日 丑
又建の辰なり

大呂 小寒 節

冬至の後十五日斗
癸小建を小寒とす
大寒 中 小寒の後十五日斗
丑子まきま大寒と

己九小寒より立春の日
まきこれ寒中せり

志ば

この月をいさく志ばはとまはさると
年極の略なりつとことと連声ゆきいふ

つらまらまらまらつら 後師走よりつらつら 稗の祝
をさると者ハまら 暗推之奥義抄まらこの月宿銭
む久伝名を初ハ或ハ難をよまら東西を驅走まらか
あ子師走月をあまらつらと是字まつら祝を設
の得之貝東篤伝云豊後國に四極山あり四波洋山
と稱まら名も別も祝とまらつらこの祝の要を記
まら似りまら似る四波の四まらまらつらこの略を
まら似る四波津と書ハ可なりまら名も六年極とまら
るは四波津と書ハ可なりまら名も六年極とまら
臘月 冬至の後三戌を臘とまら百神を祭る
漢ハ戌日を臘と魏ハ辰日を臘と晋ハ

母の月を臘とまら 説文 夏は嘉平殷は清祀周は
大腊漢は臘とまら 臘ハ穢なり獸を獲て以先祀
を言するなり 礼傳 臘の明日黍稷以來祭あり
これと初歳といふこと古の送るなり 晋の張

亮後 季冬 月 除月 月 周年 文
二出 月令 殷正 殷の正月を
廣義 窮月

霜蟾 韓墨大全 陽山の井に十二月の星名を
これをも霜蟾ハ只長夜の月光を以て
の降るころにハ秋の月をいふまら
まら彼は混雜を極まらまらまらまら
極ハ景の年極
月を略せり

春待月 藏 第月 正月を太
郎月といふ

梅初月 藏 三冬月 全
抄

弟見の朔日 日本 弟見の餅 全書或ハ乙
歳時記 子まら俗

弟見の餅

弟見の餅

弟見の餅

弟見の餅

弟見の餅

間十月朔日俾を合食の事あり人の才もまこの日を以
父兄を敬ふ及ぶ弟兄の各ありと江戸の俗を記す
餅とてこの日俵を食ふ
忌火の御夜 習六月三同
水難ありといふ俗傳あり
公事根元

大神祭 上卯 四月五日ト三膳
天智天皇御国忌
大明神の祭

崇福寺の近辺の志安寺之長生の寺とも記す
八雲御抄 臘日 道家は五臘あり正月朔日を天
臘と云ふ

臘八粥 軟き成道の見本朝の五山は於てこの
寺に於て浴佛をせり或七宝五味
の粥を粥とて臘八粥と云ふ見あり

温糟の粥 十日 六月申あり神祇官中臣ト教示
月次の祭 十日

神今食 十日 六月申あり神祇官中臣ト教示
月次の祭 十日

神佛名 十九日 仁壽殿の
所本を

かきけ綿 御仏名の御導師美
元傍に被け賜は綿

柏梨の勸盃 江次第裏に云云柏梨
の勸きハむり存の中

年の終れ魂祭 七月五日ト今ハこの
七月五日ト今ハこの

星佛賣 正月朔日卯の時イ帰る親恩経
この月十三日仏工未年の属星の形を彫りて禁裡
に於て民間にも又あるを云ふと云ふ京師の街上

星佛賣 正月朔日卯の時イ帰る親恩経
この月十三日仏工未年の属星の形を彫りて禁裡
に於て民間にも又あるを云ふと云ふ京師の街上

星佛賣 正月朔日卯の時イ帰る親恩経
この月十三日仏工未年の属星の形を彫りて禁裡
に於て民間にも又あるを云ふと云ふ京師の街上

星佛賣 正月朔日卯の時イ帰る親恩経
この月十三日仏工未年の属星の形を彫りて禁裡
に於て民間にも又あるを云ふと云ふ京師の街上

星佛賣 正月朔日卯の時イ帰る親恩経
この月十三日仏工未年の属星の形を彫りて禁裡
に於て民間にも又あるを云ふと云ふ京師の街上

星佛賣 正月朔日卯の時イ帰る親恩経
この月十三日仏工未年の属星の形を彫りて禁裡
に於て民間にも又あるを云ふと云ふ京師の街上

星佛賣 正月朔日卯の時イ帰る親恩経
この月十三日仏工未年の属星の形を彫りて禁裡
に於て民間にも又あるを云ふと云ふ京師の街上

星佛賣 正月朔日卯の時イ帰る親恩経
この月十三日仏工未年の属星の形を彫りて禁裡
に於て民間にも又あるを云ふと云ふ京師の街上

星佛賣 正月朔日卯の時イ帰る親恩経
この月十三日仏工未年の属星の形を彫りて禁裡
に於て民間にも又あるを云ふと云ふ京師の街上

星仙を賣るのあり所謂日月
水火木羅睺七曜の像を畫て賣る
事始 八六箇計

その後二月 荷前の使 三日或八吉日をえふ
奉納に同じ

拾枝抄に云く諸國より鞍馬河内
の稻を十陵八墓に奉りて賣るの使あり
御幣上

養人河原の所梳屑を貯りて
主殿寮に向く焼き
牛童の像を
公事根元

大寒の日夜羊と陰陽師土牛童子の像を門口にせり
正月黄赤白黒の土牛を春夏秋冬の色に志みて
さるる慶雲二年天下疫病さるるあり人民多く
うせり一六土牛を造り追儼といふと始り其個
の書あり農吏の爲に附を示んとて土牛を造り
とせり 公事根元 土偶人土杖 高各三尺 土年十二頭

変喜 着駄の政 五月に於て檢非違使在京
式 刑法を修ふ 頭あり
を針といひ足ありき
駒といふを刑具と

内侍所の御神樂 天子内
侍あり

仍幸河原あり刀自祝詞なりとあり内侍所の
前子主殿寮慢を引く官人庭燎さるる本末の
座を二行に設く云々 公事根元 官人内侍所より
て給をよ致是林床を養るの爲に所供米をよ
こはを所久米といふ人の給の者を聽て候り
をりてゆりては年を取るといふの事とあり
未年仍方より候り

障礙ありとあり
最勝寺の灌頂 松尾
の傍

にあり六勝寺の
一より今絶り
正月事始 衣配 源氏
玉書

○女樂を試らんとし先づ箱を配る
衣喜式に衣配ま秋のうへにせり
之俳諧ま冬とす正月の料ま
たり女服ハ養老三年に始り
九年の市ハ江戸淺草を以天下第一とす西ハ淺草
河内西北ハ湯涌下谷より親善寺内よりす地
も商人たるとハ十七日の朝より十八日の夜まで
縁人の群行昼夜をりて其実面目を奪ふと叙昌

①

この外正月八日神田明神の市正月八日糴町平河
天神の市正月八日芝巻の市正月八日とともなる

浅草 大徳寺開山忌 山崎四喜野郡
野あり大燈園

師妙超の忌日なり 時長門
和布蒔の神奉 四文

建武二年正月廿二日 皇
宇の園の北より集人の社と称す多神五座玉依
姫彦火と出見豊玉姫不著合阿度目取良より

晦日の夜四更に祝衣冠帯扱うと鎌を携へ炬を
拳神前の石礎を下り海より和布を刈る

終夜祝詞あり元且と和布を神奉 秋宮繪馬
奠下既みこころを撒一圓主に献る

毎 伊勢國を氣郡斎宮村より秋宮の橋下た
の傍に小祠あり晦日の夜法をさかるとあり行夜

神をなむひびきささや天王寺の道公法師能くよ
るるまこの橋下に宿法をの神より夜神

の馬よまゆくまをいこの法馬の神奉 切力より
よを清つとありま法華経統備の切力より

てこの神神階落山よ下規き **五條天神祭**

の券属となりつと 勝の餅 **白氷賣** ○多神大已貴

彦名へお礼ハ九月十日より多神の夜京師乃
士民系詣一白沫を買てこれを自家に焼く

又小園の候を食まの候社の傍る勝軍地茶
は供する所の候より勝の候といふ裁へらひ

そより人といふより各ともいふこの二物旧例よ
まき官よりこれを賣む近世

多の料を社司より三割表むむ **吉田大祓**

今夜締下秋家吉田の齋場の内陣に於て清
後を修え神人一人より後よりの式正月十九日の

夜子同一節分の如く秋家宗源殿に於て
神道護を修え夜神斎札三千枚を出と茲

人よりて門戸 **厄塚** 前冬の夜吉田
不貼と致し 神祇官より

おろろの式をよ塚を築くこれを **追儺**
厄塚といふ正月十九日に解去るあり

(土)

儼ハ以夜を驅之古人最之を重んず漢より唐
 のまじりく宮林中にまじりてを飾りて童子
 千餘人に至る王建が詩に云く金吾除夜進儼
 名畫袴朱衣四隊行これ今即ち民間の歌
 なり但画鐘燭と燃爆竹と耳五雜俎○大舎
 人寮鬼を勤め陰陽師祭文をのりて南敷の辺
 まで行くを續む上卿以下は追儼上人
 所敷の方より桃の弓矢を射るを射る
公事根元儼ハ晦日の下公事根源に之より云れ
 とも世流同茶座添埃裏ホハ節分の夜とあり
 按よりよりとも金吾除夜進
 儼とありハ節分ハ後のものなり
 鬼と外

福ハ内

録より云文安四年十二月廿二日明日立
 春故及昏景毎室散燉豆因唱

鬼外福内四字

云云この四字の歌なり
 於挿

於挿

ハハの於挿 竊の於挿 ○ハハの
 於挿

正土佐日記より云く今ハ竊
 の歌を用ふるを竊なり
 燉豆 鬼撃豆

浅草親音追儼

除夜より 江戸金龍山浅草
 寺あり今夜糸

詣堂中より元乃子初更の以鬼形の者一人堂外
 出又又方相氏の假面を被り方々のを遣
 て堂を巡る後除夜の札三千枚を撒く諸
 人は与ふ糸詣の人各ありを以拾う持るる自
 家の門
 船神祭 北方除夜肉を以祀神を
 戸は復 益弘益婆と寺

節分 年内立春

古今集元方
 一のちまそふ

除夜

十二月晦日
 除夜といふ言

るハ世夜舊年を除く本邦の俗この目つく言
 を焼く食ふ是継身の別より云く食ふは又實
 をする家よりを食ふは借取の
 祝語あり今ハ大歳の歌なり
 大歳 元日を
 小歳と

ついでと曾を
大歳と云瑠璃代醜備
晚歳月令 餽歳上

○別歳○行歳○除歳○歳暮○いね年
○年の終○年波流○年の果○守歳○年尾

○この際○年の隣
春と隣隣ハ程近ト
分歳マキ急ク○春迄

字典曰風土記云除夜祭先竣事長幼聚飲祝
頌而散謂之分歳○支那の俗除夜の先人をあつ
長幼あつて飲祝頌
散をなす分歳といふ也

十二月の月を
私大奥州南部の人十二月の月を
以九月日あり
又ハ登望朔日を以晦日とせり

厄夜
大と云ふ
神鬼は装束の男婦鑼鼓を以門を巡り鐘をを
これを市夜胡と名づく又驅崇の類夢花録月令
廣義○十二月二十四日これを文年といふ巧者塗抹
鬼形を装束し驅催と叫跳し利物を索乞醍醐朝

唐山は瀧散を瑠璃代醜篇云誰人歳暮家
人宴集をを瀧散といふ常穂州云田婦有佳獻
潑散新歳除○本邦の歌にいふもこの月下旬
良賤親戚朋友を結ぶ酒醺を
正ありこれを年忘といふ年中の勞を忘る

樂事
年忘
節季候○むくハ乞見とのこれ人家の門に
くち肩をあつて身を以狗を致さず常事といふ
くといふ錢を乞ひんとせを梅といふ三十六番
職人哥合さるの園のとたり今も節季候といふは是なり

八月鱧取
江海所よりこれあり佐別領傍の海
とるものを名産とて上流坊下飯訪

一里より冬月氷をもちて厚サ二三尺に及ぶこの耐まかり
て種を採る先氷の上より小魚を言ひて火を焚く
穴を穿ちたる穴を種を建て漁者の休ふ所とて又
細成ハ繩を入る穴を穿ちもも焼火を以て
繩を以て共餅を以釣るとこの數賢ハ氷を

胸搞

胸搞

胸搞

胸搞

胸搞

胸搞

(五)

と記しるるを掃を用由近來南緯より一種首子七星
ある魚を得て土人七星魚といふ是本草綱目之鱧魚
眼の傍に七ツの星ありといふ事
このたらひまやと或人以此言
節季 二十日より
九七八日とを

波女等 十日より
伊勢大神宮系統
元日神降をたふさる

子孟宗竹 五月竹冬も竹を
常陸國菘和留の鯉當國の
名産なりしもこの節を以採
菘和留の鯉取
臨川鮭 乾鮭

鹽鯉 口臨鮭
この節歳暮の
年比市

○松竹賣 ○注連飾賣 ○被魔弓賣
拍搗栗賣 ○小鞠羽子板賣
和漢戸の十二月下旬屋塵を掃ふ漢のこれを
除殘といひ我俗を掃ふと云ふ又燂をひかへさる
と云ふ ○吳中十二月廿七日屋塵を
掃ふを除殘といふ 表中即歲時記

札納め

祈禱の礼を殊
く日二絶する
夜天より一家の善悪を以天に奏し是日婦人
女子齋を持ス云俗猶これを竈公といふ萬畢術
云竈神晦日天より人の罪過を白す 五雜俎
竈神六女あり常は月の晦を以天より人の罪を
大さるの八紀を奏し小者八算を奏す 酉陽雜俎
○我俗十二月下旬修験を極く竈神をまつこれを
竈後又竈注連といふ正月
五月九月も儀々の如し
餅搗 糯米洗
ちち花

竈公祀 俗皆十二月二十日竈
を祀り謂竈神この

大乙子向ひく大歳を皆桌つる
来年の風まをさるる心卑す

鵲始て巢
○鶺鴒の巢元多く存せむ或ハ仲冬
或ハ季冬或ハ孟春始て巢す 月令廣義 鶺鴒 月
令

大原の雜喉疾
山城國愛宕郡江文明神
の社あり大系物接す云
大系村に蛇井村の大淵といふ池に蛇をまつて
をりし里はゆくり人をさるるをさるるありし時各

大原の雜喉疾
の社あり大系物接す云

大系村に蛇井村の大淵といふ池に蛇をまつて
をりし里はゆくり人をさるるをさるるありし時各

をりし里はゆくり人をさるるをさるるありし時各

をりし里はゆくり人をさるるをさるるありし時各

をりし里はゆくり人をさるるをさるるありし時各

をりし里はゆくり人をさるるをさるるありし時各

夜をこらして男女二匹あつてまうけりてさうさこれ
を天系の雑喉夜といふ夜男女のこころをさへ

とみ **三冬草** **困見** 大海の夜を九岳
の草とて葉をさう

明年あま吉山と申す **温古録** **逆表** 上
注

年木鴉 春用所の新
このころは推せん **鯛味噌** 肉
味噌

を酒まて交熟を細 **豆腐芍薬弱水** 味
味香と云歳末の節物

宝船 大海の夜七福神の船をひたさ
所の画を松の下子布ハ多く吉慶と

宝船といふこの画のよまがさ夜のととのぬり
のよめさ文といふ史文のふとまつくこのふ
も古くよりのふとさそ武備志の日本風土記
このふとのせり今ハ正月二日の夜
哉をさり江戸の街に元日宝船の画を賣 **糺** **枕**

糺の礼 ○これも初夜つたてのころ ○糺ハ熊

よ似る象の鼻犀の目牛の尾虎の足唐のとき
多く糺を二回屏を作る瘡痛溼邪を辟く百

氏文集よまそり ○糺のまをくらりてのハ九
説より **門松** 堀川
百道 **古曆**

一層の巻返 **早咲梅** **歳藏市**

江戸日本橋の東二町より四日市まであり之河万歳

江戸は染りて服士の衣を備へこの衣は八女

房上端よりいづるといふ毎年四日市よりこの價を

まかえりて衣をさす市といふと

王子の鬼火 江戸近郷王子村箱根の社
辺に装束模といふ板樹あり毎

年十二月晦日の夜半この末の下より群狐火をさ
りてその鬼火を以て農民明年の豊凶をトス

今夜社内 **年の夜の大神樂** 大海の夜
より正月十
詠人系統

詠人系統

勿論紙おのり表八句の
くくくくくくくくくく

百韻

表八句 月 裏十句 九句月
二表古句 月 裏十句 十句月
三表 二の表 三の裏 二の裏
名表 二の表 同裏 七句
表十句 裏十句 表十句 裏八句

七十二候

表八句 裏十句

四十四

○百負の二の二折接を七十二とあらわす
表八句 裏十句 名表古句 裏八句

五十韻

○百負の二の表を七十二とあらわす
七十二候六十負四十とあらわす
花月の定座百韻角 歌仙 表六句 月 裏十句

源氏

表六句 月 裏十句 表十二句 月 裏十二句
表十二句 月 裏十句 表十二句 月 裏十二句
○源氏の二の折を仙とあらわす 表表を女にあらわす

長歌行

表八句 月 裏十六句 九句月
表十六句 月 裏八句 七句月
表四句 裏八句 初句月 表八句 七句月
表八句 月 裏十句 表十二句 月 裏十二句

短歌行

○長歌の二の折を仙とあらわす
表六句 月 裏十句 表十二句 月 裏十二句
表六句 月 裏十句 表十二句 月 裏十二句

三物 雙句 服

第三

表八句

表二句 神祇 新教 運 云常
述懐 懐舊 古人の名 同字 名所
病体おろし 但馬 古人名 古人名 古人名
るを初んふあさるの表の句体もくくく

句數 同季

四季の句數
表六句 春秋 三句月
表六句 春秋 三句月
表六句 春秋 三句月



戀

二句より一の句より一の句を捨てて四番の句を
恋の句の初端より出たてけ句より一の句を

神祇

神祇。教。旅体。述懷。

水邊。山類。夜分。居所。

一の句より三の句の
初め

人倫

人倫。人名。名所。國名。

儻物。降物。天象。時分。飲食。

衣類。植物。藝能。

一の句より二の句の
初め

火体。風体。言語。病体。書体。

一の句より二の句の
初め

勺去。人倫。人名。國名。名取。支体。儻物。

降物。濁假名。二字假名。言語。鳴物。朝

夕と智。た。時分。日月星と智。る。花。

木竹草と智。る。植物。虫鳥獸類。

生類。

一の句より二の句の
初め

同字。生類。極

物。時分。夜分。衣類。述懷。神。叙。山類。

無常。水邊。居所。書体。病体。風体。

火体。同季。恋。

一の句より二の句の
初め

儻物。雲霞。光物。

降物。雪霜。雨露。霞。雪の乾。る。星電。

夏の正花

余花

若葉花

秋の正花

花火

花小杜鵑

花相撲

花燈籠

冬正花

雑の花

作花

繪の花

帰花

餞花

茶の花

花魁

花毛氈

花の種

花籃

花の香

花の塗

花のき

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

雜

柳浦 橋田

櫻人

諏訪祭

藤子住虫

黒牡丹

非季の詞

放生河

雲山

雷

麻毛筆

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

花の歌

花の舞

花の歌

花の舞

花の歌

劉訓多言 ○落葉秋風 空塚の君 露條
牛の夏冬 夕敷の上 未摘花の 鶉條

まー 志のまきり 花田良 何色釜 雲地綿
野花ひ 良の紅葉 既の雪 眉如紅 柳垂

和事多 柳管 柳管 柳管 柳管 柳管
竹のまき 細代屋風 同笠 同輿 美ちる泉

振煮の箱 舊紙袴 舊紙 菜白 菜飯 柳干
若る麦切 粟條 うー味嚼 ひえまびの飯

胡麻和 銀麻 極町 海芽生 日産 白の土
○右の如くまきををまを各難餘をよて起し

意の詞

意も定まらぬ詞も但句体を以定
此一考れども古人意の二句の如く
とよて有り是ハ三句の海り附てち抑りなると思ふ
詞も意をよせく前句の語を述する意も
意句の如く意の詞の如くあらし附て
表れりしにふりて遊遊ある有り今人か
事流ちね私と意の詞の如く定めぬ
句は本意をうりしにふりて下のよと意句ハ特小

一巻の大奉心へり事も実情はあやされどかくは初心

の人まじきもあふれが意句のつふは此詞をさし出
あやうとあはれをよて意の詞と

定まらぬれ句の如く表れりしに
待一先結し思しをよ一絶一絶之入一憂一

ちがる一を他一彩花 意の奴意衣意字意病
妖 取よ 意のまきり 騾 私語 賤云

後更 後め死 人目の関 艶云

待宵 物のおどろひ

二道かき

垣間見 ぬま衣

人のむすあ 継母の港云はありりとのちあ 意の濡衣
をうりてむすあが表をさししとよと定てその衣

あしを蒸圓てをさうし下総葛飾郡志同郎中の
美女を或人の云々更志武蔵の方言女の惣縁をうと

伊勢物語 七つ八東國の 夫婦 はう八男前 嫁 はあ
方言夫をうてよ

取女 媒 水人月老 御 はあ 房 あや 夜不

洞房 洞房兩株合 羽平帳紅圍 あや
小向ちり 散花 水滸傳

肉屏 肉陣 共工房中 あや 後官 美人の

美人の名 美人を画 王牆字八那君
漢の元帝の宮

人なり 漢書 元帝後宮既多一常不見下次得也
乃画工をうと形を圖せしめ圖を案れり百とを畫
詔官人皆画工に賂を多き者十方女多き者又畫
を独王端肯を逐て見ると成得也匈奴胡人
美人を求めぬ成とせんよとあに放て上圖を案
く昭君を以て初む去り及て君と顔を見り

後宮 一と 帝 を 悔 む 去 り 名籍 已 定 す 帝
倍 を 外國 より 人 を 復 へ 更 へ 乃 其 其 を

窮 きう 画工 を 市 す 西京雜記 上
漢書 琴操 操 の 説 ハ 途 ハ 異 ナリ

返魂香 漢書 李夫人 の 季 延 年 の 妹 武 帝 の 夫 人
返魂香 の 世 人 の 効 ハ 亦 有 也 ハ 略 シ 又 唐

の玄宗 羅 公 遠 就 ク 揚 メ 妃 ガ 冥 魂 を 香
五雜俎 上

蘭香 待 黃熟香 十 種香 競 馬香 三 友香 長 越香

沉香 蘭 鴉香 小 鳥香 住 吉香 百 和香 奇 蘭香

伽羅 赤 梅檀 力 氏 舟 香 復 初香

沈泥 源 氏香 香 乳 香 盞 香 匙 掛 香 香

白 白 衣 香 うる香 守 宮 の 織 女 の 肘 の ぬい

雜

あけハ一秋 清 くと 春 心を う ぐ 七 時 ハ 忽 リ 清 風
持物 志 入 ん ぞ り 官 ハ 蠶 之 石 龍 子 と 名 ク 守
宮 の 名 ハ 秦 始 自 帝 官 人 の 私 あ ん 下 次 守 く 名 を
観 ク 官 人 の 名 故 ク 名 何 とい ハ 〇 時 珍 云 碁 碁 の 兵 を

の鏡万畢術博物志。墨客揮犀皆其法
あり大抵其術を必く八別と術の心合はる

黛 眉掃 **男色** 美少年 推流 **雞姦** 男色入

常陸帶 妻の紐 **筑石鴻** 夏の紐 **雜喉寢** 色經

密男 於曾風流 今代人棍の元色田舎と凡
る老ハ得之れとハ鈍

中俗おれそす花をいふがや一樹をそそぐ候志遠
り万葉小於曾の風流士又於曾也公君又心鈍向

為在をいへり **妹許ゆ** 女の許へ **紅絹** 紅絹

と申ると三吟未本記より「滔さき尺杖ふりぶちり
うちりともといふお白玉をいげやく世ふをいれとさう

とよ附りあまを人の廊うらひとんさ **女房** 女房男房元官人の称 **妾** 和名抄

白中ふ拾奥のさるる之をさる紅絹といふも白
体よ **女房** 女房男房元官人の称 **妾** 和名抄

外婦 指 **女** 貴妃 官嬪 姉 妹 御女 吉妹子

花街 花里 江口 大磯 紙屋町 漆妻松 吉原の里

板橋 町之板橋難記 **青樓** 妓門 妓家 揚屋

遊女 遊行者 總彌女 妓女 媚女 離妓

女樂 舞姫 白拍子 阿曾見 出女 夜鼓 辻君

小三板 上三板 水詩傳 **赤丸** 白會 髪織 長髪 赤丸

白眉神 妓院小者 **鴉老** 妓樓の老女 **私窠** 色經

傾城 傾城傾國元色 **飛子** 飛子 飛子 飛子

陰間 男色 **金剛** 金剛 金剛

雜

野郎 伽やぶ はるを舟まき大坂で伽やぶといふ 亡 仁義礼

智孝時忠信 おきき 晩傘 元源のありに戸吉系の花街の八を亡す 中後胡而つと八傘を奪ふ

まのまれ 晩傘 とら其角 神集 正字通路 史

女媧正姓 娥 切字 乱人を依ふ切字を以て

皆同是日神媒 いそげんは四十七字なる切字との言をよむきつり後世より切字の

てふをばいそげんは四十七字切字なるは唐山人 唐山人

焉哉乎也を以 虚字 虚字は虚字といふ限

うゝ成日やまうめらうてふをば又これに其角 てふをばの四文字なり

七文字なり いそげんは四十七字切字なるは唐山人

ともし初字 いそげんは四十七字切字なるは唐山人

を切字 いそげんは四十七字切字なるは唐山人

と人の後白 いそげんは四十七字切字なるは唐山人

梅はく いそげんは四十七字切字なるは唐山人

い人教 いそげんは四十七字切字なるは唐山人

梅はく いそげんは四十七字切字なるは唐山人

いそげん いそげんは四十七字切字なるは唐山人

治定 いそげんは四十七字切字なるは唐山人

いそげん いそげんは四十七字切字なるは唐山人

雑

あらわの **もね** 万葉集 萬葉得志
云はねののそえ **治定の哉**

この初をまうとつげ 治定
まは 桜 柳 木の敷あり **る云** あり

けし 越し ちとさ云 **現在** あり

のーを 押れぬなり **未来** あり

向 希 希 希 希 希 **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

まのー 希 希 希 希 希 **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

雜

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

あら 公 現 まのー 切 ちなり **未来** あり

六乃の書肆東四郎俳諧
 兼時記ふまとてこはふけ
 小紙とふ著作書主人ハる
 さまいゆつらは終とし
 まふらおとまあらるらの
 このや路道の予りあのまとて
 同しにいはたりやてこの記
 とわく審ふらふん終く考へ
 多くいいて深くおもい呼
 ば兼時記を得る者ハ兼時記は
 わらひ兼時記中に兼時記は
 一しと古を檢今と校てとし
 表さると也もくいうと也れ兼時記を

いろ神代より春夏秋をれ名を
 ありとて十二乃月をいふらち
 同えす月立月限をがなと押
 ありふくまと三日又日不との事い
 冬のつらというと海の空はさき
 と記くふともと花の開き月象
 法蘭或を其草れ人虫の出没を
 してかく人兼時記乃兼金色を記
 此を苗代時に兼時記は兼時記
 時ハ田のつらとや志ふれし
 つおあ積よはてそ不らくありし
 してけりゆ急おいとれ正とし
 唐の漢字とて於はりも也れ

かくはけいふまのりるは量他得のこ
 れ記さうじやれととも俳諧歳
 月たといへぬは作者乃他得をな
 りふ名ふししや世の人ひまひ
 こころのこちれ兼可記とらん
 中しこ増いあはれかし享和二年
 癸亥の鼻月とらわれあり考り
 しふす



江戸曲亭先生著

俳諧いろは韻小刻巻近刻

此書ハ四季の詞をいろは分各
 十二月配傍小圈を能伸
 叙草木生類句去本の織とて俳諧
 席上推乃甚と調法なる書なり

享和癸亥暮春發行

東都通油町 蔦屋重三郎
 浪華順慶町 柏原屋清右衛門
 尾府玉屋町 永樂屋東四郎
 肆 書

